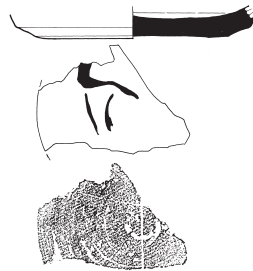


東前原遺跡

(第7地点第2次)

区画道路10-2号線道路改良(その3)及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2016

水戸市教育委員会

東 前 原 遺 跡

(第7地点第2次)

区画道路10-2号線道路改良(その3)及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

水 戸 市 教 育 委 員 会

ごあいさつ

水戸市は那須岳を水源とする那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波水戸市域の東側にある東前原遺跡は、那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しています。本遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」や、6世紀後半に築造された首長墓とみられる北屋敷古墳群、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

近年、東前原遺跡が位置する東前町周辺は、区画整理事業に伴い宅地化が急速に進んでおり、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしています。埋蔵文化財は、その性格上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と現状に復すことができないため、私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならない貴重な財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調和を図りながら、文化財の保護・保存に努めているところです。

今回の調査は、東前原遺跡の南端において実施した初めての発掘調査で、奈良・平安時代から中～近世にかけての集落跡が検出されました。特に、調査区を縦断する形で検出した大型の溝跡は、本遺跡の北側でも確認されており、その展開を含め周辺の調査成果の蓄積が期待されるところです。中～近世以降の遺構として注目されるのは、井戸跡と貝層です。東前原遺跡における既往の調査では、明確な中・近世の集落の痕跡が確認されていないことから、当該時期の土地利用の一端を窺い知ることができる成果となりました。こうした調査成果は、東前原遺跡はもとより、南側に近接する小原遺跡を含めた東前町一帯の歴史を復元していくうえで貴重な資料となるものです。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端を復元することで貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

平成 28 年 7 月

水戸市教育委員会
教育長 本 多 清 峰

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸市東前町地内における区画道路10-2号線道路改良（その3）及び流域関連下水道工事に伴い実施した、東前原遺跡第7地点第2次の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社地域文化財研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
- 3 調査概要及び調査組織は以下のとおりである。

所在地	茨城県水戸市東前町 1076, 1094-1・2, 1124-1・2, 1126 の一部
調査面積	690 m ²
調査期間	平成 28 年 3 月 28 日～平成 28 年 4 月 22 日
調査主体	本多清峰（水戸市教育委員会教育教育長）
調査担当者	高野浩之（株式会社地域文化財研究所）
調査参加者	[発掘調査] 有田洋子・飯田 昭・石崎洋子・石崎寿子・市毛祐一 江橋和子・大山年明・岡部五男生・小坂部克己・鬼澤 勲 海後晴美・川又誠二・栗原芳子・齊藤宏光・鈴木潤一・高岡真士 高安丈夫・高安幸且・飛田とし子・中嶋順子・渡辺恵子 [整理調査] 川村理華・小林真千子・木村春代・野村浩史・榎 勝雄・増田香理
事務局	中里誠志郎 水戸市教育委員会事務局教育次長 飯村 博史 同文化課埋蔵文化財センター所長 米川 暢敬 同文化財主事 太田有里乃 同主事 昆 志穂 同埋蔵文化財専門員 丸山優香里 同埋蔵文化財専門員 菅谷 瑛奈 同嘱託員（公開活用担当） 山戸 祐子 同嘱託員（庶務担当）

- 4 本書は、昆、米川、丸山、高野が分担して執筆し、水戸市教育委員会の助言・指導に基づいて高野が編集した。各節の文責は文末に記載してある。
- 5 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市大串貝塚ふれあい公園内水戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々及び諸機関よりご教示、ご協力を賜った。
(敬称略・順不同)

水戸市都市計画部市街地整備課・東前地区開発事務所 豊島工務店 (株)日本窯業史研究所
水野順敏

凡 例

- 1 測量は日本測地系を用い、挿図中の方位は座標北を示す。
- 2 挿図中で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
SD：溝跡 SX：井戸跡 SK：土坑 P i t：柱穴・ピット T r：試掘トレンチ
K：風倒木痕・植栽痕・攪乱等
- 3 土層図及び断面図に記した数値は標高を示す。
- 4 遺構の形態・規模は基本的に現存している状態で判断した。計測は壁上端で行った。深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置までを計測している。
- 5 遺構平面図及び断面図の縮尺は基本的に 1/60 とし、 図は 1/30 とした。各図にスケールで示した。
- 6 遺構の土層及び遺物の色調表現は、『新版標準土色帖 2003 年版』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）に準拠した。土層説明の中で、「φ」は粒状規模をミリ単位で明記し、含有量は 2%以下を「微量」、3～9%を「少量」、10～19%を「中量」、20%以上を「多量」とし、多量のものについては（ ）付で含有量を示した。いずれも同書の「面積割合」を参照している。
- 7 出土遺物の縮尺は土器類，瓦類，石器類を 1/3，銭貨類を 1/4 とし，各図にスケールで示した。
- 8 遺物観察表の標記は，（ ）内を復元値，〈 〉内を残存値とし，遺物の計測値は規模を「cm」，重量を「g」で表した。色調は上段が外面，下段が内面で，内外面同色の場合は 1 色のみの表記である。
- 9 出土遺物一覧表の中で，接合したものは全体で 1 点とし，逆に同一個体が明らかであっても接合しないものはそれぞれを 1 点とした。
- 10 本文中で使用した地図類の出典は，第 2 図が「明治 18 年 7 月第一軍管地方迅速測図」，第 3 図が「水戸市埋蔵文化財包蔵地分布地図（平成 24 年度版）平成 24 年 3 月 水戸市教育委員会」で，それぞれを加筆修正している。
- 11 挿図中で使用したスクリーントーン及び線種は以下凡例図のとおりである。
- 12 表紙に使用した図は第 8 図 SD01 出土遺物 2 の墨書土器である。

凡例図



…貝層



…試掘トレンチ・攪乱範囲

目次

ごあいさつ

例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
(1) 調査の方法	1
(2) 調査の経過	2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 東前原遺跡における既往の調査	5

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要	9
第2節 検出された遺構と遺物	9
(1) 溝跡	9
(2) 井戸跡	14
(3) 土坑	16
(4) ピット	18
(5) 貝層	18
(6) 遺構外出土遺物	20

第4章 総括

写真図版

抄録

挿図目次

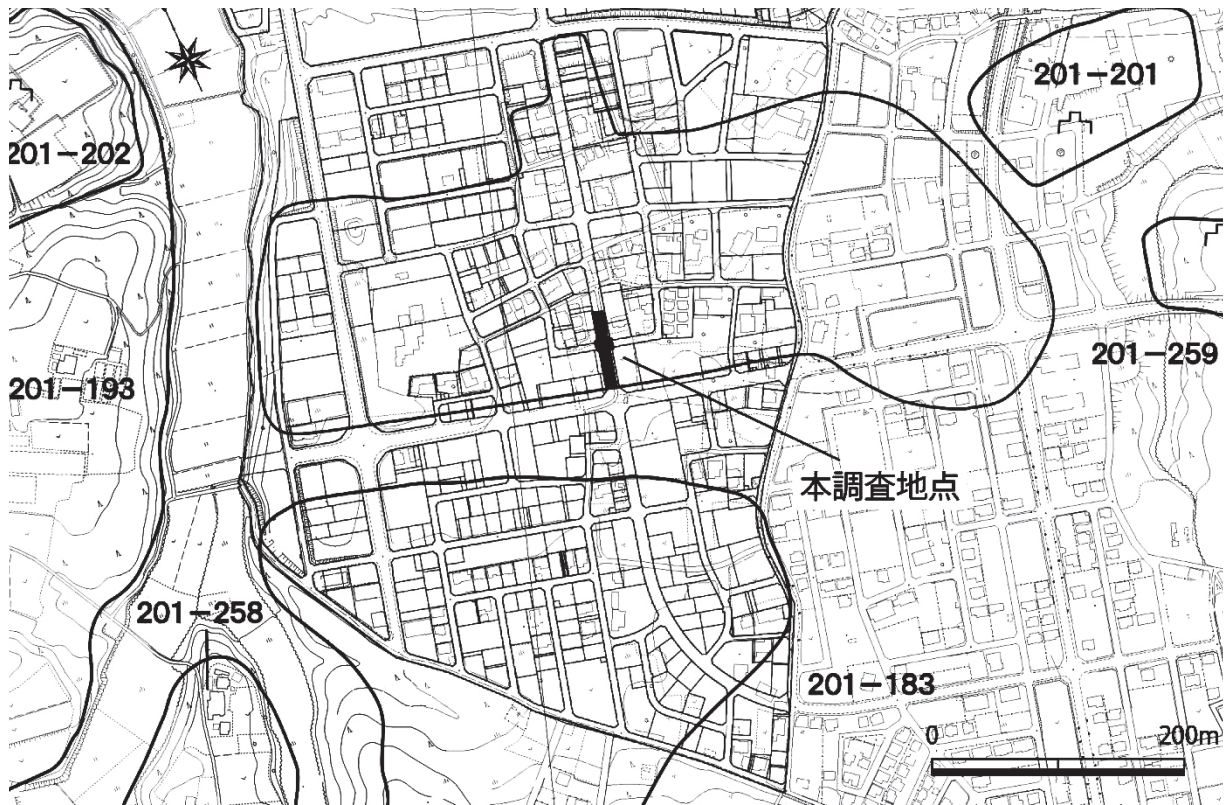
第1図 調査地点位置図	2	第10図 SD03	12
第2図 遺跡の位置		第11図 SD04	13
第3図 周辺の遺跡	2	第12図 SD05～09	13
第4図 東前原遺跡における既往の調査地点	6	第13図 SX01	15
第5図 調査区全体図	8	第14図 SX01 出土遺物	16
第6図 基本堆積土層図	9	第15図 土坑	17
第7図 SD01・02	10	第16図 ピット	17
第8図 SD01 出土遺物	11	第17図 貝層	18
第9図 SD02 出土遺物	12	第18図 遺構外出土遺物	19

表目次

第1表 主要な周辺の遺跡一覧	3	第6表 出土遺物観察表(土器)	20
第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧	6	第7表 出土遺物観察表(瓦)	21
第3表 ピット一覧表	18	第8表 出土遺物観察表(石製品)	21
第4表 貝類計測値グラフ	19	第9表 出土遺物観察表(銭貨)	21
第5表 貝類計測値一覧表	19	第10表 出土遺物集計表	21

写真図版目次

図版 1	調査区全景(北から) / 調査区全景(南から)
図版 2	調査区北側全景 / 調査区中央部全景 / 調査区南側全景 / SD01 全景 / SD02 全景 / SD01・02 土層断面 / SD03 全景 / SD04 全景
図版 3	SD05～09 全景 / SX01 全景 / SX01 土層断面 / SX01 土層断面 / SK01 全景 / SK02 全景 / D2グリッド内貝層検出状況 / 貝層断面
図版 4	出土遺物



第1図 調査地点位置図 (1 : 6,000)



第2図 遺跡の位置 (○が東前原遺跡, 1:25,000)

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成26年10月17日付けで、土地区画整理事業に伴い、水戸市長（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱、以下「事業者」という。）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」（教埋第1066号）が提出された。開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「東前原遺跡」に該当していることから、平成27年5月8日に試掘調査を実施した。試掘調査では、計3本（総調査面積：67.5㎡）の調査区を設定し、今般工事区画の北端と南端の調査区から溝跡4条や土坑1基、ピット5基を検出した（東前原遺跡第7地点第1次、教埋第1067号、第1図）。

以上のことから、本件は「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」原則Ⅲ「恒久的な構造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当すると判断された。市教委は、現状保存に向け事業者と協議を重ねたが、工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は困難であるとの結論に達した。そのことから市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知について、記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した（教埋第604号）。

この通知に対し、県教委教育長から平成27年7月1日付け文第897号にて、工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。これを受け、市教委は工事対象地のうち、埋蔵文化財が確認された面積690㎡を調査対象とし、平成28年3月28～平成28年4月22日の期間に発掘調査を実施することとした。

（丸山・昆）

第2節 調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、試掘調査の結果に基づき現在使用されている道路部分を含めた690㎡を対象に行った。発掘作業は表土をバックホーで除去し、発生土はダンプによって調査区外へ搬出した。表土除去後は全て人力による作業で、溝はサブトレンチを入れ重複や層位を把握した後に新しい時期の掘り込みから順に進めた。それ以外の遺構は土層観察用のベルトもしくは半截によって土層を確認しながら慎重に掘り下げた。記録は、事業計画によって設置された公共座標の基準点をもとにX軸＝37580、Y軸＝62540の交わる地点を基点として10×10mの方眼グリッドを組んだ。グリッドにはX軸にはアルファベット、Y軸には算用数字の記号を用いてそれぞれの交点に双方の記号を併用したグリッド名を付し（第5図）、実測や遺物採集の際に使用した。遺構実測は1/20縮尺を基本とし、写真撮影は35mm判モノクロフィルム、同判及び6×7判カラーリバーサルフィルムデジタルカメラを用いて、調査の過程で随時撮影した。

発掘調査終了後、出土した遺物は全て水洗いし、乾燥後に可能な限り注記を行った。注記に際しては遺跡記号「201259-007」と出土地点、採集日を記載した。遺物は接合作業を行った後、全て分類して種別や個体・破片ごとの点数を数え、出土遺物集計表（第10表）に掲載した。遺構図は第二原図作成後、修正を加えた上でデジタルトレースを行った。遺物は全て原寸大で実測した。編集はDTPソフトを用いて報告書の編集作業を行った。

(2) 調査の経過

発掘調査は、3月28日より表土除去を開始し、同月30日までに完了した。4月6日までに基準点・水準点測量及び発掘器材の搬入を行った。8日から発掘作業員が着任し、休憩施設等の環境整備を行った後、遺構確認から作業を開始した。同時に遺構配置図の作成を行っている。11日から遺構の掘削を開始した。この日はSD01とSX01の二手に分かれて作業を行ったが、SD01は調査区西壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、掘り直しが行われた痕跡を確認した。翌12日からはSD01・SX01部分の掘削を継続するとともに、貝層の検出作業を開始した。SX01は確認当初、竪穴建物跡になるか不明であったが、この日の段階でかなりの深さを有することが判明し、礫も多く含まれていることから井戸跡である可能性が出てきた。13日から14日にかけてもSD01・SX01及び貝層の検出に重点を置いて作業を継続した。SX01は掘削を進めた結果、井戸跡であることがわかった。ここで本来は遺構名を「SE」と変更するところではあったが、既に遺物の取り上げ等作業が進んでいることもあり、「SX」のままとした。15日、SD01・SX01の掘削を終え、記録作業を行った後に、土層観察用のベルトを残してSD01掘り直しが行われる以前の溝SD02の掘削に入った。一方で貝層は検出状況の写真撮影・範囲の記録が終了し、18日から貝の採集を開始した。19日、SD02や貝層の掘り下げと併行して土坑及びピットの掘削を継続した。20日には調査の終了した南側より全体の清掃を開始し、21日に調査区の全景写真を撮影した。翌22日に発掘機材・施設等の撤収を行って、発掘調査の全工程を終了した。

整理調査は発掘調査後速やかに開始している。遺物の水洗い、注記、接合、遺物写真撮影、遺物実測、DTPソフトウェアによる編集の順に作業を行った。遺構図及び原稿執筆は、遺物の整理と併行して進め、報告書の刊行となった。(高野)



第3図 周辺の遺跡 (★印が本調査地点, 1 : 30,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、関東平野の北東部、茨城県のほぼ中央に位置する。市域の北部には、西から東へ流れる那珂川とその支流により形成される沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。その下流域右岸の大半が水戸市域となる那珂川は、栃木県的那須連山を水源として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋へと流れ出る。この那珂川が存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが水上交通によって結ばれることから、歴史的に水戸市域は交通の要衝地となることが多かった。

東前原遺跡は、東茨城台地の北東部をなす水戸台地の東側縁辺、標高約19mのところの位置しており、東西300m、南北150mほどの畑地に展開する。当該地周辺は明治18(1885)年には広範囲にわたって松林であったことが確認できるが(第2図・第3図)、近年では土地区画整理事業に伴い、大規模な土地改変が行われ、宅地化が進んでいる。

第2節 歴史的環境

東前原遺跡が立地する東茨城台地、特に東端部には、縄文から近世に至るまで、数多くの遺跡が密集している。ここでは東前原遺跡の周辺に分布する遺跡群とそれらを取り巻く歴史的環境を概観する。東前原遺跡周辺における人々の営みの歴史は先土器時代にまで遡る。当該期の資料は、東前原遺跡と

第1表 主要な周辺の遺跡一覧

遺跡番号	名称	所在地	種別	遺物	備考
201-006	下畑遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中・後)、打製石斧、石鏃、石錘、磨石、凹石、石棒、石剣、土器片錘、土師器(古後)	
201-141	雁沢遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
201-175	大串貝塚	塩崎町	貝塚	縄文土器(前・後)、石製品、貝刀、釣針・刺突具	一部国指定
201-176	大串遺跡	塩崎町	集落跡	縄文土器(前・後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)、布目瓦、灰釉陶器	
201-183	小原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-186	金山塚古墳群	大串町	古墳	円筒埴輪、鉄鏃、刀子	前方後円(1)、円3(5)
201-187	大串古墳群	大串町	古墳	五獣鏡、銅輪、直刀、鉄鏃、壺鏡、素環鏡板付轡	前方後円1、円1(5)
201-189	愛宕神社古墳	栗崎町	古墳		
201-192	森戸古墳群	森戸町	古墳	土師器(古)、円筒埴輪、形象埴輪、勾玉	前方後円1、方0(1)、円15(17)
201-193	上平遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-201	椿山館跡	東前町	城館跡		
201-202	和平館跡	栗崎町	城館跡		
201-242	高远古墳群	大場町	古墳		円2
201-244	諏訪前遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-245	沢幡遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)、墨書土器、円面硯、紡錘車、砥石、鉄鏃、鉄鎌	
201-246	梶内遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後、奈・平)、須恵器(奈・平)、刀子、円面硯、墨書土器、陶器、古銭、煙管	
201-247	高原遺跡	大串町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、土師質土器、煙管	
201-248	北屋敷遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後、奈・平)、須恵器(奈・平)、瓦、陶器	
201-249	北屋敷古墳群	大串町	古墳	形象埴輪、直刀、小刀、鉄鏃	円1(2)
201-251	伊豆屋敷跡	栗崎町	城館跡		
201-252	上野遺跡	栗崎町	集落跡		
201-253	佛性寺古墳	栗崎町	古墳		
201-254	フジヤマ古墳	栗崎町	古墳		
201-256	諏訪神社古墳	栗崎町	古墳		
201-257	千勝神社古墳	栗崎町	古墳		
201-258	打越遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-259	東前原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈・平)、須恵器(奈・平)	本調査遺跡
201-260	住吉神社古墳	東前町	古墳		
201-261	大串原館跡	大串町	城館跡		
201-263	宮前遺跡	大串町	集落跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、	
201-299	上の下遺跡	東前町	包蔵地		

第2章 遺跡の位置と環境

石川川を挟んだ対岸に位置する森戸古墳群からの出土例が知られているのみである。森戸古墳群では、第12号墳（大六天古墳）の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。それら石器群の大部分は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土であるが、剥片であるものの、1点が周溝底面のローム中から出土している（伊藤 1976）。これらの資料のほか、明確に遺跡としてくくられた範囲内での採集ではないが、水戸市百合が丘、下入野町地内などにおいて、ガラス製黒色デイスaitoや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている（川口 2005, 2008）。

縄文時代の遺跡としては、第一に挙げるべきは大串貝塚であろう。大串貝塚は『常陸國風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国指定となっているが、その名に恥じぬ豊富な出土資料は、質・量ともに茨城県下における当該期の貝塚を凌駕している（井上・金子 1996）。また、下畑遺跡では、加曽利E式、大木8b式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており（井上 1985）、複式炉を有する住居跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる。

弥生時代については、東前原遺跡周辺における状況も水戸市全域における傾向に変わらず、生活の痕跡は他時期のそれに比べてやや低調な傾向にある。しかしながら、後期に至っては、丘陵沿いの台地上や縁辺部に立地する小原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物の採集や出土が報告されており、これらの調査成果の蓄積により、徐々にではあるが、水戸市域における弥生時代の土地利用の様相が像を結びつつある。

古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群などを筆頭に、古墳が活発に築造されるようになる。これらの古墳のうち、北屋敷古墳群第2号墳では発掘調査が実施されており、円筒埴輪、武人をはじめとする人物埴輪、馬形埴輪など形象埴輪が多く出土した（井上・千葉 1995）。このうち、ほぼ全身が出土した武人埴輪は水戸市指定文化財となっている。集落の分布としては、中期の集落に係る資料に乏しく、周辺では管見に触れないが、前期の集落としては大串遺跡（井上 1994）、後期の集落としては梶内遺跡（樫村 1995）、小原遺跡（第3地点）などの調査事例がある。当該台地上においては、前期・後期ともに活発な土地利用がみとれる反面、中期における土地利用が緩慢であると言わざるを得ない。このことは集落展開の動態について、中期において相応の変動があったことを示唆するものである。

奈良・平安時代となり、律令制下の中央政権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及び郡寺の造営が、渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において行われ、律令体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は全域が常陸国那賀郡域内にあり、当該遺跡周辺は同郡芳賀里（郷）に比定される（中山 1979）。当該時期の遺跡として、先ず注目すべきは大串遺跡の存在である。大串遺跡第7地点における発掘調査では、断面V字状を呈する大型の溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されている。また、束柱をもち、壺地業を有する桁行6間×梁行3間の大型の掘立柱建物跡なども発見され、一般集落とは大きく異なる様相を示している。大型の掘立柱建物柱抜き取り穴からは多量の炭化材と共に炭化米が、区画溝からは炭化した穎稻や穀稻が出土しており、これらの建物が正倉としての性格を有し、火災により焼失していたことが明らかになっている。また、「厨」銘墨書土器も出土するなど、官衙的色彩の強さが目立つ遺構・遺物群から、本遺跡は那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている（小川・大淵・川口ほか 2007）。

このほか、梶内遺跡は、7世紀から10世紀まで、途中希薄になる時期は存在するものの、比較的

長く継続する集落跡として注視すべき遺跡である。当該遺跡では、「舎人」「長」や里（郷）名を記したとみられる「芳」銘墨書土器、9点もの円面硯を出土しており、官衙関連遺跡としての性格を匂わせる（檜村 1995）。また、東前原遺跡直近に位置する小原遺跡では、近年相次いで実施した発掘調査の成果により、6世紀から9世紀にかけて存続した集落であることが明らかになっており、「官」銘墨書土器の出土から、梶内遺跡と同様の性格を有している可能性が考えられる（太田・土生 2015、齋藤・米川 2016）。以上のような遺跡群の集中する様は、『常陸國風土記』那賀郡条の「平津驛家西一二里有岡名曰大櫛」の記事（秋本 1958）とあわせ、東前原遺跡とその周辺地域が、常陸国那賀郡芳賀里（郷）の中核ともいえる地域であったことを物語っている。

中世、武士が実権を握る時代となり、東前原遺跡が所在する旧常澄村域と重なる恒富郷を根拠としていたのは、常陸平氏大掾氏の一流である石川氏であった（常澄村史編さん委員会編 1989）。東前原遺跡周辺の当該時期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく、その詳細については不明な点が多い（水戸市教育委員会 1999）。

近世において、当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言い難い。しかしながら、当該時期に帰属する溝跡や土坑などは各所で散見され、その土地利用の痕跡を窺うことはできる。なかでも、『新編常陸国誌』などに立原伊豆守の居所と記されている伊豆屋敷跡では、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている（井上 1998）。

以上のように、東前原遺跡が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまで、豊富な遺跡が存在している。古代には、大串遺跡や梶内遺跡などの官衙関連遺跡が展開をみせ、古代常陸国那賀郡の中核であった台渡里官衙遺跡群との色濃い関連性は疑うべくもない。現在、東前原遺跡周辺における調査の蓄積には目覚ましいものがある。これらの調査成果の丹念な検討から、当該地域の歴史像が結ばれていくことが期される。

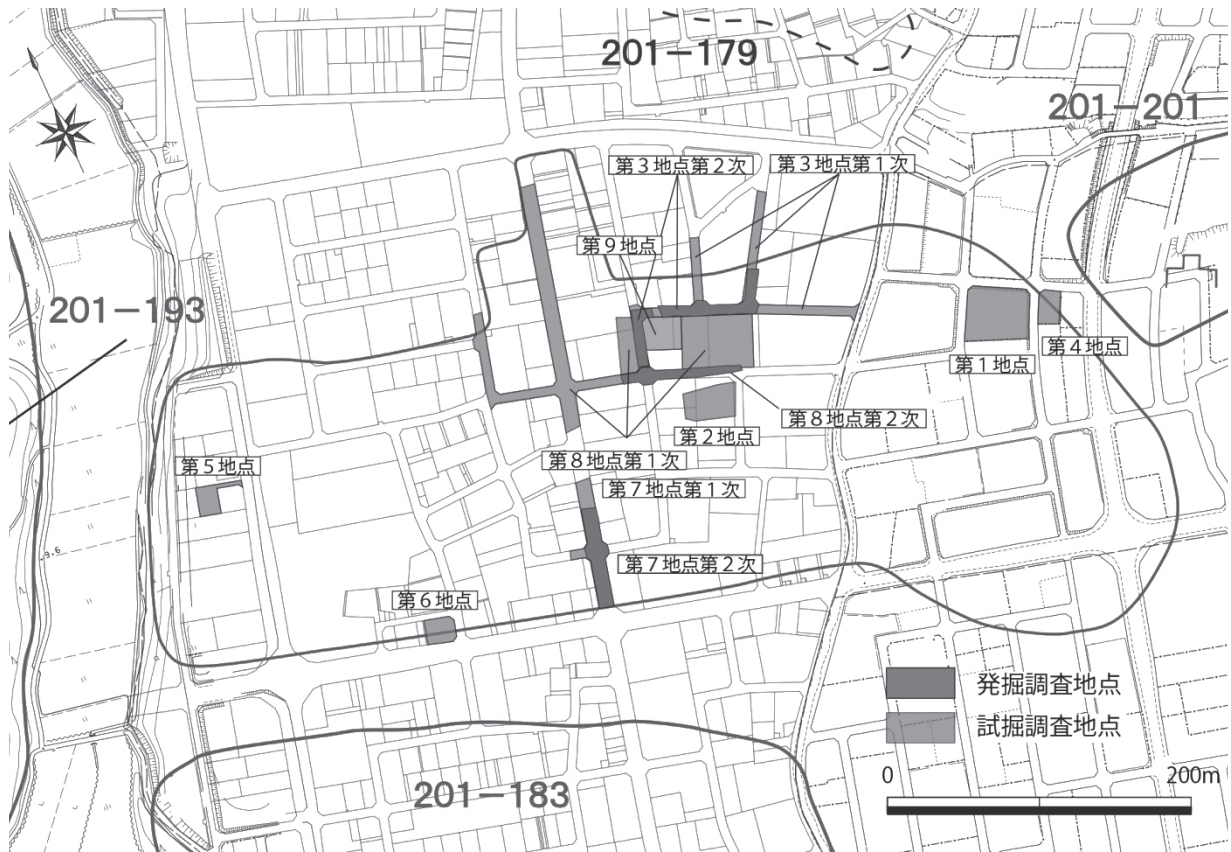
（丸山・米川）

第3節 東前原遺跡における既往の調査

東前原遺跡における調査は、平成20（2008）年の第1地点の試掘調査から始まり、当該調査実施地点を含めて計9地点において行われている（第4図、第2表）。これらの半数は個人住宅建築に伴う調査面積が狭小な試掘調査であり、東前原遺跡南端部に位置する第6地点にて性格不明遺構が1基確認されたことを除き、明確に埋蔵文化財として捉えられる遺構は検出されていない。しかしながら、表採や調査区表土中では少なからず遺物が散見されることから、調査区外に遺構が存在している可能性は極めて高い。また、近年の土地区画整理事業に伴う試掘調査では、そのほぼ全ての調査区から濃密な埋蔵文化財の分布を確認している。そのうち、これまでに第3地点及び第8地点にて4度に亘り発掘調査を行っている。

第3地点第2次では、竪穴建物跡11軒（奈良・平安）や掘立柱建物跡2棟（時期不明）、土坑9基（奈良・平安、中近世）、溝跡6条（奈良・平安）、柱穴状遺構1基（時期不明）が検出されており、出土遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品、石製品、獣骨がある。竪穴建物跡は、一辺が6mを超えるものから2.5mの小型のものなど様々な規模の建物がみられ、主軸方向は北北西—南南東を主とするが、東—西に向いたものもわずかに存在することから、異なる時期の集落が展開していたことが推測される。なお、当該地点で確認された竪穴建物跡の多くは北壁にカマドを持つ形状を基本としている

第2章 遺跡の位置と環境



第4図 東前原遺跡における既往の調査地点 (1 : 5,000)

第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧

地点名	回数	種別	調査期間	調査箇所	調査原因	遺構	遺物	備考
第1地点	1	試掘	H. 20. 11. 11.	東前2丁目57・60	個人住宅建築	—	○	
第2地点	1	試掘	H. 24. 2. 2.	東前町1098	個人住宅建築	—	—	
第3地点	1	試掘	H. 26. 5. 8. ~5. 6.	東前町1104-1~1118-1	土地区画整理事業	○	○	
第4地点	1	試掘	H. 26. 7. 30.	東前2丁目61, 62	個人住宅建築	—	○	
第5地点	1	試掘	H. 27. 1. 22.	東前第二土地区画整理事業75街区符号15区画	個人住宅建築	—	—	
第3地点	2	発掘調査	H. 27. 2. 9. ~3. 10.	東前町1106-1, 1113, 1115-2, 1116-1, 1117, 1118-1	土地区画整理事業	○	○	
第6地点	1	試掘	H. 27. 4. 28.	東前町1147	個人住宅建築	○	○	
第7地点	1	試掘	H. 27. 5. 8.	東前町1124-1~1126	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	1	試掘	H. 27. 6. 16. ~6. 19.	東前町1120~1122-1	土地区画整理事業	○	○	
第9地点	1	試掘	H. 27. 7. 15.	東前第二土地区画整理事業48街区符号6・7区画	個人住宅建築	—	—	
第8地点	2	発掘調査	H. 27. 12. 22. ~ H. 28. 1. 20.	東前町1118-1ほか	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	3	発掘調査	H. 28. 3. 1. ~4. 6.	東前町1120, 1209-2・7・9, 1209-10の一部	土地区画整理事業	○	○	
第8地点	4	発掘調査	H. 28. 3. 8. ~5. 16.	東前町1121, 1192-4, 1209-3・5・6・7・9	土地区画整理事業	○	○	
第7地点	2	発掘調査	H. 28. 3. 28. ~4. 22.	東前町1076, 1094-1・2, 1124-1・2, 1126の一部	土地区画整理事業	○	○	本報告書

が、そのうち1軒のみ、真北隅にカマドを持つ竪穴建物跡が確認されていることも注視される。

第8地点第2次では、竪穴建物跡6軒（奈良・平安）、掘立建物跡5軒（中近世）、ピット5基（中近世）、土坑9基（中近世）、ピット状遺構群1群（中近世）、溝跡2条（中近世）が確認されており、遺物は土師器、須恵器、土師質土器（中近世）、銅製品（煙管）などが出土している。竪穴建物跡の主軸は概ね南一北に向いており、1軒のみ一辺が7m程の大型の建物があるものの、それ以外は4m程度のもので多く、規模や出土遺物から奈良・平安時代に帰属するものと考えられる。その他、中～近世の円形や方形の粘土張り土坑も検出している。

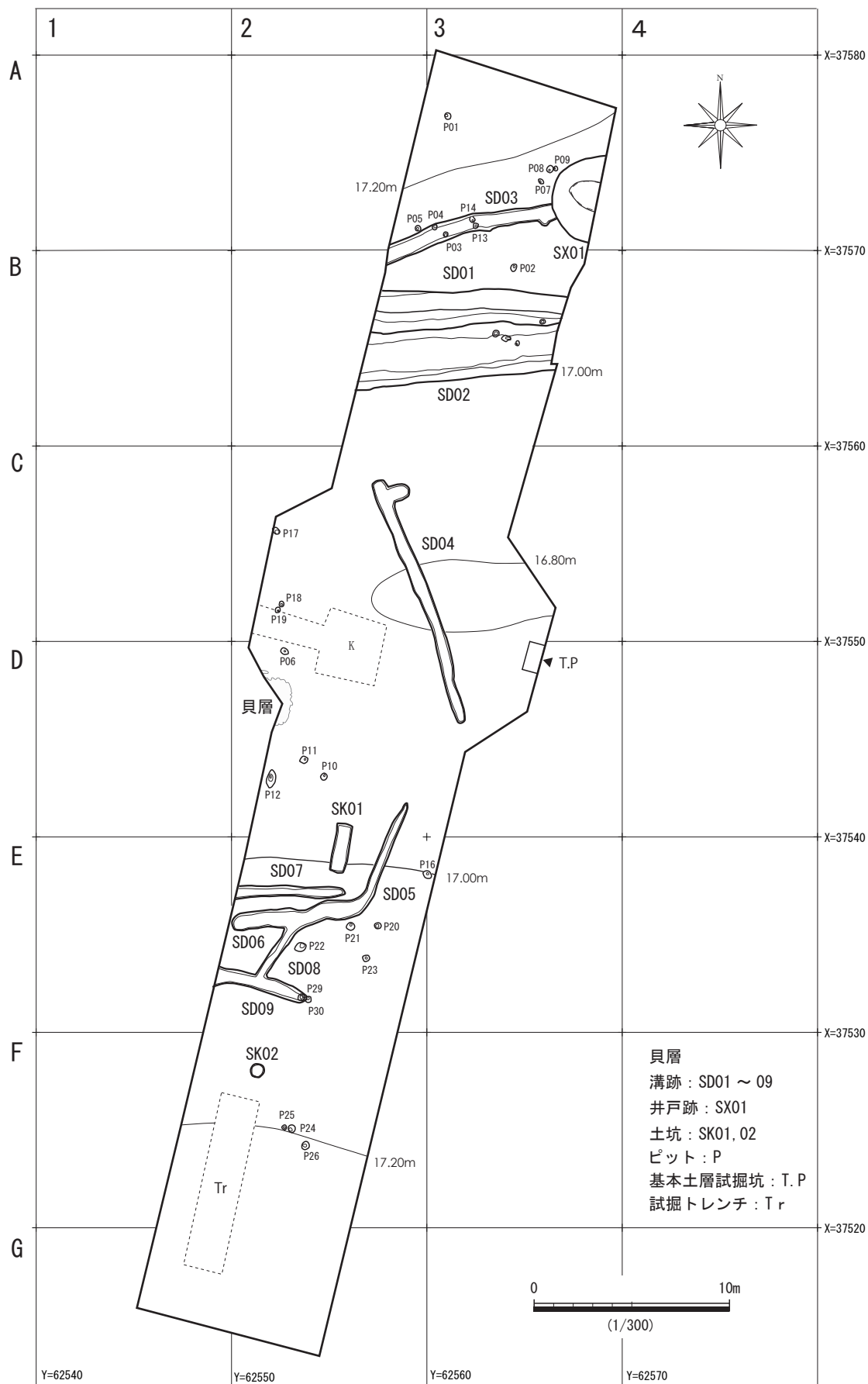
第8地点第3次では、竪穴建物跡19軒（弥生・奈良・平安）、掘立柱建物跡3軒（奈良・平安）、ピット98基（奈良・平安）、土坑12基（奈良・平安）、溝跡2条（奈良・平安）などが確認されており、弥生土器、土師器、須恵器、古瓦（奈良・平安）、土製品（奈良・平安：土玉・支脚）、鉄製品（奈良・平安：刀子）などが出土している。当該地点では、東前原遺跡においては初の確認事例である弥生時代後期の竪穴住居跡2軒を確認している。また、調査区中央には東西に走る大型の溝跡を検出しており、上幅は4mを超え、V字に近い薬研状を呈している。

第8地点第4次では、竪穴建物跡17軒（弥生・奈良・平安）、ピット17基（奈良・平安・中近世）、土坑7基（奈良・平安・中近世）、溝跡4条（中近世）が確認されており、弥生土器、土師器、須恵器、土製品（弥生：紡錘車、奈良・平安：羽口、管状土錘、中近世：羽口）、鉄製品（奈良・平安・中近世）などが出土している。当該地点では、調査区北側に弥生時代の竪穴建物跡が集中して検出された。また、一部の竪穴建物跡では鍛造剥片や碗状鉄滓、羽口、棒状鉄製品などが出土しており、製鉄施設としての利用も考えられる。また、第8地点第3次で確認されている大型の溝跡の延長プランが検出されている。

これまでの調査結果を精査すると、東前原遺跡における弥生時代の集落は既に失われている台地の北端部に展開した可能性が窺える。また、奈良～平安時代の集落は8世紀中葉から11世紀前半頃まで確認されており、正倉別院であると考えられている大串遺跡第7地点との繋がりを強く感じさせる。なお、第8地点3・4次調査で検出している溝跡に関しては、様々な見解が示されており、明確な帰属年代や性格は特定されていない。今次調査地点でも同様の規模の溝跡を確認している。この遺構を含めて未だ不透明な部分が多い東前原遺跡は、今後の追加調査によって当該地域を語るうえで極めて重要な位置付けがなされてくる遺跡であると思われる。（丸山・米川）

【参考・引用文献】

- 秋元吉郎校注 1958 「常陸国風土記」『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店
- 伊東重敏 1976 『大六天古墳（森戸古墳群第12号墳）』茨城県東茨城郡常澄村教育委員会
- 井上義安 1985 『水戸市下畑遺跡 市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 1994 『水戸市大串遺跡 市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 1998 『伊豆屋敷跡確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 『水戸市大串遺跡 常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳 市道常澄7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 太田有里乃・土生朗治 2015 『小原遺跡（第3地点） 都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・木本肇周・渥美賢吾・関口慶久・株式会社京都科学
- 2008 『大串遺跡（第7地点）一介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 樫村宣行 1995 『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 梶内遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・小川和博・大淵淳志 2002 『水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 齋藤 洋・米川暢敬 2016 『小原遺跡（第16地点） 都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 中山信名 1979 『新編常陸国誌』宮崎報恩会
- 水戸市教育委員会 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』



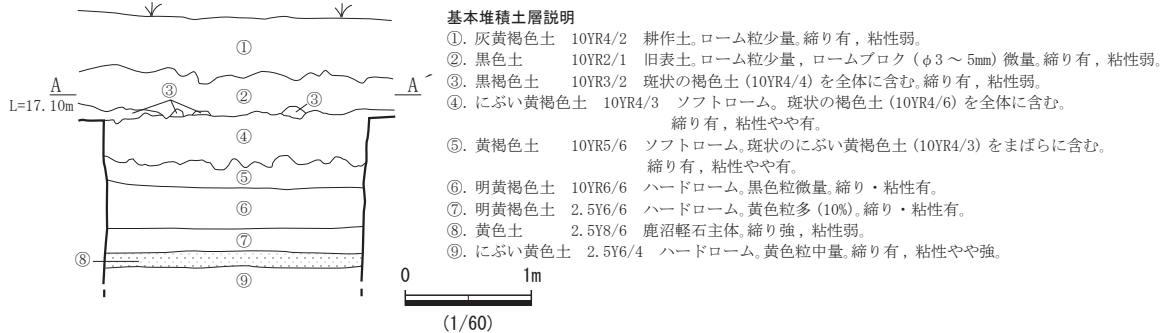
第5図 調査区全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

検出された遺構は、溝跡9条、井戸跡1基、土坑2基、ピット27基、貝層1基であった。溝跡は、SD01・02が重複し、SD02が廃絶した後にSD01の掘り直しが行われている。SD01・02とともに並走するSD03の3条が奈良・平安時代の溝と考えられる。それに対しSD04～09は耕作土の土層に近い状態で、出土遺物も摩耗した小破片の土器が混在することから、新しい時期に掘り込まれた溝と判断される。井戸跡は調査区の北端で検出され、播鉢状を呈した大型のものとなり、出土する遺物は奈良・平安時代の土器が主体である。貝層は調査区中央部の西壁にかかって検出されている。含まれる貝のほとんどはオオタニシで、埋没している層から概ね近世以降の堆積とみられる。

基本堆積土層は、窪地となった調査区中央部のD3グリッド内で観察を行った。①層の旧表土下に旧表土②層が約30cmで堆積し、色調の黒さが強めである。④・⑤層はソフトローム層、⑥層以下がハードローム層となり、徐々に鹿沼軽石とみられる黄色粒の量が増加する。遺構確認面105cm下の深さからハードローム層⑦・⑨層に挟まれ、鹿沼軽石層⑧層が10cm程度堆積する。遺構の掘り込みが深いSX01の壁面から観察される地層と比較すると、⑧層の検出された標高にあまり大差は認められないことから、ハードローム層下は灰白色粘土層、礫層と続いているようである。(高野)



第6図 基本堆積土層図

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 溝跡

SD01 (第7・8図, 第6・8表, 写真図版2・4)

検出位置はB2・3グリッドで調査区を横断する。本跡はSD02が廃絶した後に、掘り直しが行われた溝である。掘り方は逆台形状で、中段から上端にかけて緩やかな立ち上がりとなっている。規模は現存値の長さが9.65m、上端部の最大幅3.60m、下端の最大幅1.88mで、中段の幅は2.20～2.30m程である。深さは68～80cmを測る。走行方向はN-88°-Eを示す。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈し、壁際はやや明るめのにぶい黄褐色土が堆積するが、含有物は少ない。遺物は、土師器4点(坏1, 甕2, 鉢1), 須恵器42点(坏15, 高台付坏6, 盤1, 蓋1, 甕17, 甗1, 壺類1), 石製品1点が出土した。上層から17点, 下層から30点で、8世紀第3四半期から第4四半期の須恵器が主体である。SD02の遺物が混在する可能性もあるが、下層から出土した土師器坏1は、底径の小ささや調整から新相になり、SD02との新旧関係からも時期は9世紀代以降と考えられる。

SD02 (第7・9図, 第6～8表, 写真図版2・4図)

検出位置はB2・3グリッドで調査区を横断する。本跡は北側をSD01の掘り直しが行われた際に

SD01 土層説明

- 5. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロック(φ3~5mm)微量,斑状の褐色土(10YR4/4)を全体に含む。締り有,粘性弱。
- 6. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ3~7mm)微量,斑状の褐色土(10YR4/4)をまばらに含む。締り有,粘性弱。
- 7. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒少量,ロームブロック(φ3~7mm)微量。締り有,粘性弱。
- 8. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3~5mm)少量。締り有,粘性弱。
- 9. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒少量,ロームブロック(φ3~5mm)微量。締り有,粘性弱。
- 10. 褐色土 10YR4/4 ロームブロック(φ3~10mm)少量。締り有,粘性弱。

SD02 (SPA-SPA') 土層説明

- 1. 褐色土 10YR4/4 ローム粒中量,ロームブロック(φ3~10mm)少量。締り有,粘性弱。
- 2. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ10~30mm)多量(40%),黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~40mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 3. 黄褐色土 10YR5/6 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~30mm)多量(20%)。締り有,粘性有。
- 4. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ3~10mm)中量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)少量,斑状の褐色土(10YR4/4)をまばらに含む。締り有,粘性弱。
- 5. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ5~30mm)多量(20%),斑状の褐色土(10YR4/4)を全体に含む。締り有,粘性やや有。
- 6. 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ5~10mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 7. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロック(φ3~7mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 8. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ5~15mm)多量(30~40%),黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~10mm)多量(20%)。締り有,粘性やや有。
- 9. 褐色土 10YR4/4 ロームブロック(φ10~40mm)多量(40%),黄褐色(10YR5/6)ブロック少量。締り有,粘性やや有。
- 10. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)を密に含む。締り有,粘性やや有。
- 11. 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ5~10mm)中量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~40mm)中量。締り有,粘性弱。
- 12. 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/3)混土。黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)少量。締り有,粘性有。
- 13. 褐色土 10YR4/6 ローム土混土。黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)微量。締り有,粘性やや有。

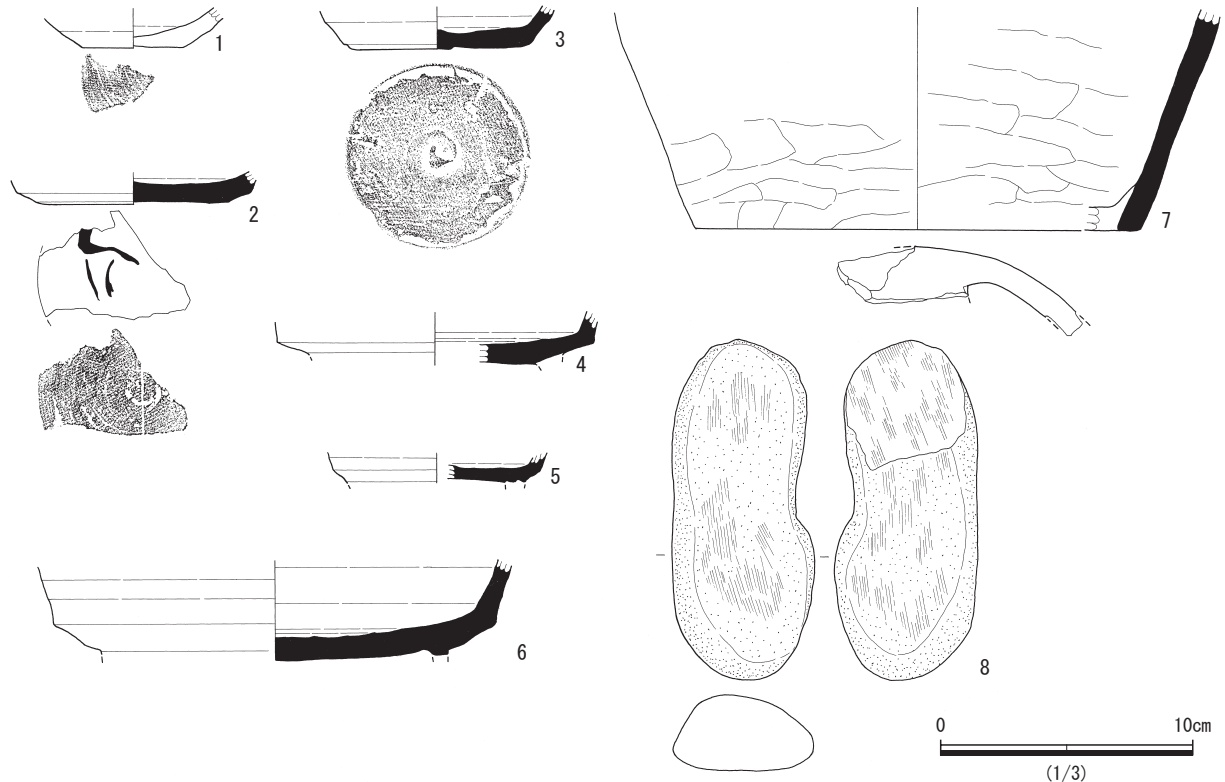
SD02 (SPB-SPB') 土層説明

- 1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3~5mm)多量(20%),同(φ5~15mm)少量。締り有,粘性やや有。
- 2. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ5~30mm)多量(40%)。締り有,粘性やや有。
- 3. 褐色土 10YR4/6 黒褐色土(10YR3/2)混土。ローム粒多量(20%),ロームブロック(φ3~5mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 4. 黄褐色土 10YR5/6 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~7mm)少量。締り有,粘性有。

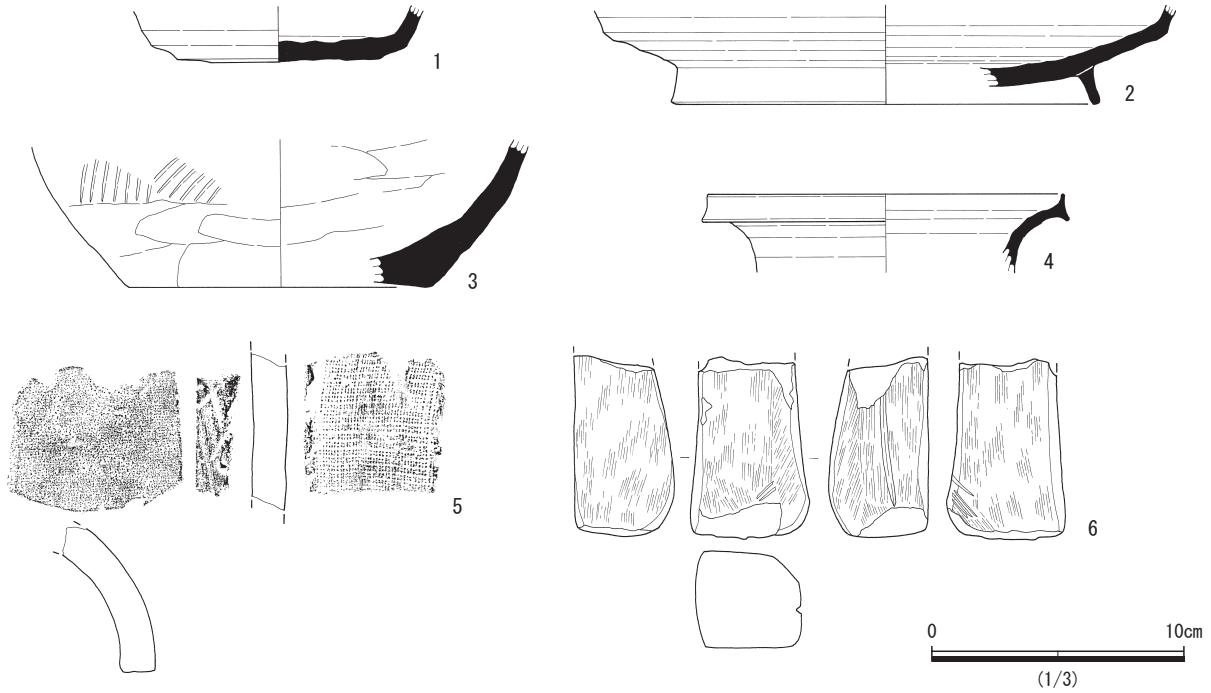
- 5. 褐色土 10YR4/6 ロームブロック(φ5~20mm)を密に含む。締り有,粘性有。
- 6. 黄褐色土 10YR5/6 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)多量(20%)。締り有,粘性有。
- 7. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ10~30mm)多量(30~40%)。締り有,粘性やや有。
- 8. 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒多量(20%),ロームブロック(φ5~20mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 9. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量(20%),ロームブロック(φ3~10mm)少量。締り有,粘性弱。
- 10. 褐色土 10YR4/6 ロームブロック(φ5~30mm)多量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ10~15mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 11. 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒中量,ロームブロック(φ5~10mm)少量。締り有,粘性有。
- 12. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒多量(20%),ロームブロック(φ3~5mm)少量。締り有,粘性有。

SD02 (SPC-SPC') 土層説明

- 1. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ3~7mm)中量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~20mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 2. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒多量(20%),ロームブロック(φ3~20mm)多量(30~40%),黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~15mm)少量。締り有,粘性有。
- 3. 黒褐色土 10YR3/1 ローム土中量,ロームブロック(φ3~5mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 4. にぶい黄褐色土 10YR5/3 ロームブロック(φ10~30mm)を密に含む。締り有,粘性有。
- 5. 黒褐色土 10YR3/2 ローム土多量(40%),ロームブロック(φ5~15mm)少量。締り有,粘性やや有。
- 6. 暗褐色土 10YR3/4 ローム土多量(20%),ロームブロック(φ10~15mm)中量。締り有,粘性やや有。
- 7. 黄褐色土 10YR5/6 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~30mm)多量(20%)。締り有,粘性有。
- 8. 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~10mm)多量(20%)。締り有,粘性弱。
- 9. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ5~15mm)中量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5~30mm)密に含む。締り有,粘性やや有。
- 10. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒少量,ロームブロック(φ3~10mm)中量。締り有,粘性弱。
- 11. 褐色土 10YR4/6 ローム土,ロームブロック(φ3~7mm)多量(40%)。締り有,粘性やや有。
- 12. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ3~5mm)中量,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)微量。締り有,粘性やや有。
- 13. 褐色土 10YR4/6 ローム土主体,黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)少量。締り有,粘性有。
- 14. 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ3~10mm)多量(30~40%),黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ3~5mm)微量。締り有,粘性やや有。

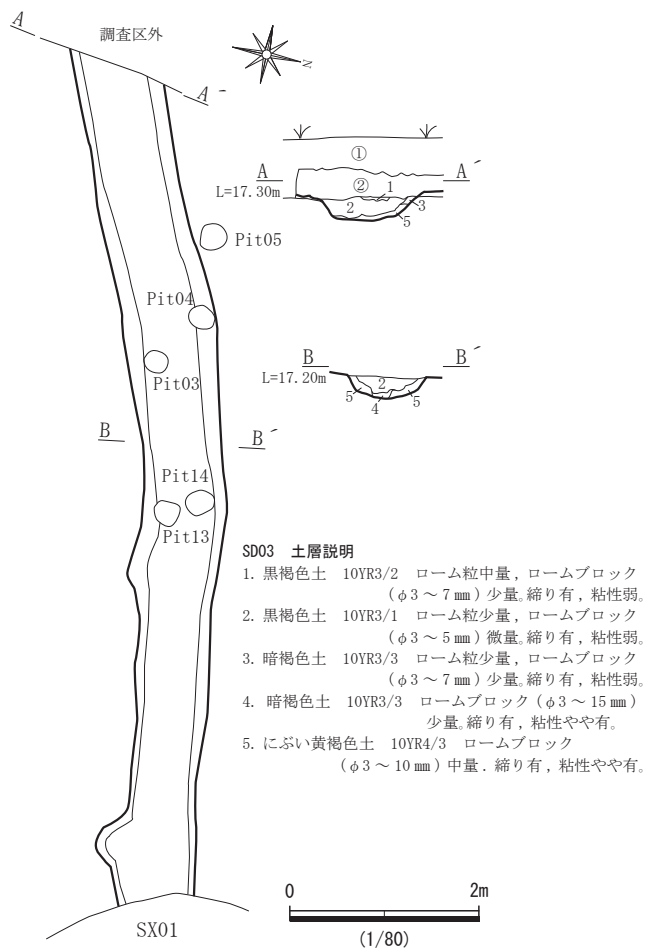


第8図 SD01 出土遺物

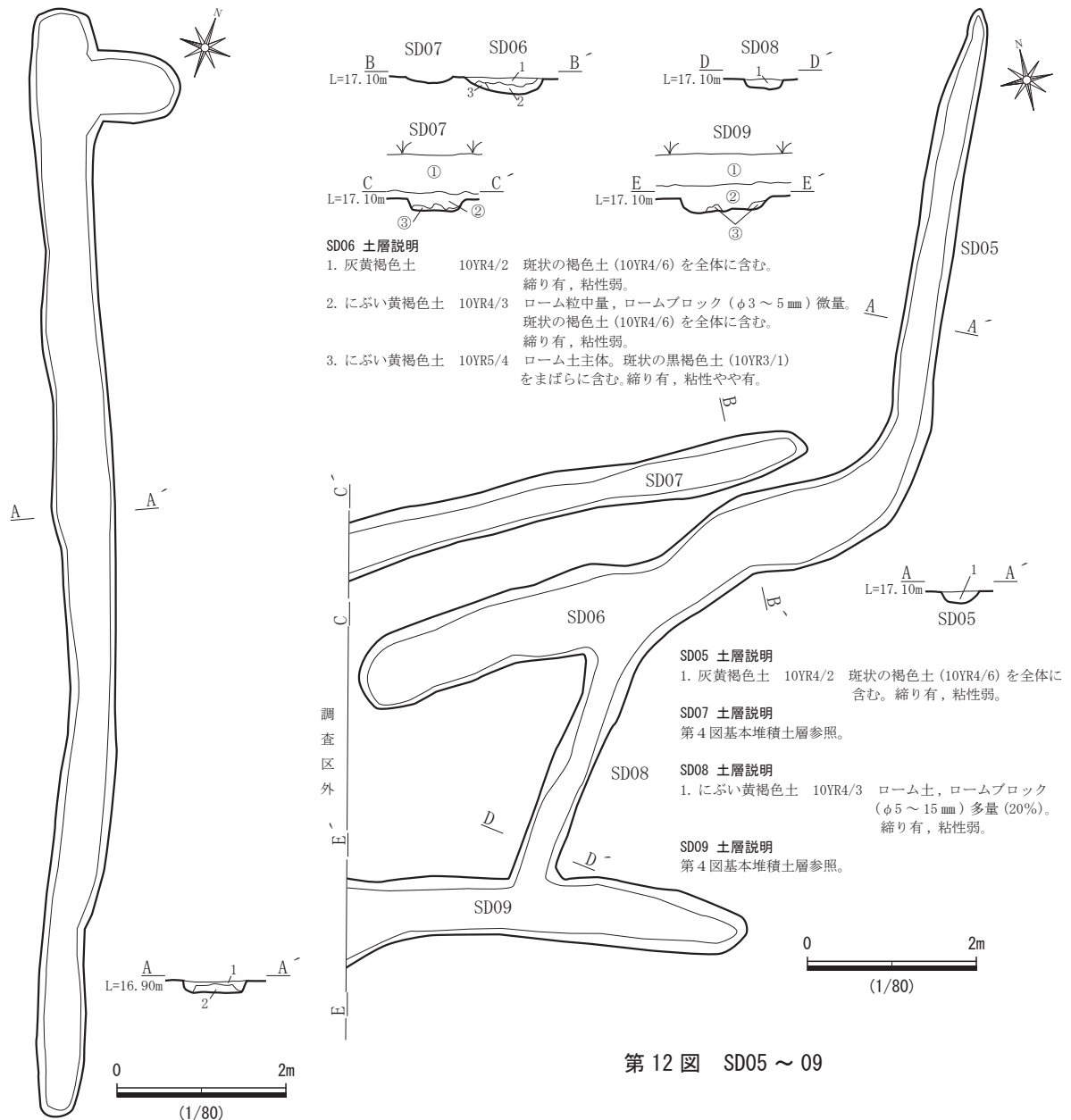


第9図 SD02 出土遺物

切られている。掘り方は逆台形状で、北壁が底面から上端に向かって約 40° の角度で立ち上がるのに対し、南壁は約 58° の角度で北壁よりは急な立ち上がりである。規模は現存値の長さが 9.65 m、上端部の最大幅は推定値で 3.84 m、下端の最大幅は西壁際が 1.60 m であるのに対し、東壁際は 1.10 m となり、西から東へ移行するほど徐々に狭くなっている。深さは 129 ~ 140 cm を測る。走行方向は $N-84^\circ-E$ を示し、SD01 とほぼ同様の方向を示すものの若干傾きが大きい。覆土はローム土・ロームブロックを多量に含む黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土が堆積し、下層と上層で2回にわたる埋め戻しの痕跡が認められる。双方の埋め戻しの間には含有物の少ない黒褐色土層が堆積していることから、1回目の埋め戻しが行われた後、一旦放置された可能性がある。その後上層部の埋め戻しが行われ、SD01 を掘り直したと考えられる。遺物は、土師器 7 点（坏 1，甕 6），須恵器 30 点（坏 14，高台付坏 3，盤 2，蓋 1，甕 6，壺類 4），瓦 1 点（丸瓦 1），石製品 1 点，不明土器 1 点が出土した。上～中層にかけての出土がほとんどで、2～4 は上層からのもの



第10図 SD03



第12図 SD05 ~ 09

第11図 SD04

SD03 (第10図, 写真図版2)

検出位置はA2・3, B2グリッドで調査区を横断する。本跡は東側をSX01によって切られる。他にPit03~05・13・14が重複するが, 新旧関係は把握できなかった。掘り方は浅い掘り込みであるが逆台形状を意識したと思われる。規模は現存値の長さが現存値で9.00m, 上端部の最大幅は0.98m, 下端の最大幅は0.62mである。深さは13~25cmを測り, 東側が浅めである。走行方向はN-75°-Eを示し, わずかに湾曲しながら延びる。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は出土しなかったが, 覆土の状態がSD01・02に類似することから, 奈良・平安時代頃に埋没した溝跡の可能性はある。

のである。下層からは3点のみで, 須恵器坏1が出土している。供膳具は須恵器が主体となり, 下層から出土した須恵器坏1の形態を重視するならば, 溝の埋没時期は8世紀第3四半期~第4四半期と考えられる。

SD04 (第11図, 写真図版2)

検出位置はC2・3, D3グリッドにまたがる。掘り方は浅い箱状を呈する。規模は長さ13.20m, 上端部の最大幅は0.74m, 下端の最大幅は0.64m, 深さは7~13cmを測る。走行方向はN-19°-Wを示し, ほぼ直線状に延びる。覆土は灰黄褐色土, 暗褐色土の人為的堆積である。遺物は, 土師器1点(甕1)が出土したが, 小破片で摩耗が著しい。覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

SD05 (第12図, 写真図版3)

検出位置はD2, E2グリッドである。掘り方は浅い半円状を呈する。規模は長さ5.97m, 上端部の最大幅は0.45m, 下端の最大幅は0.30m, 深さは15cm前後を測る。走行方向はN-22°-Eを示し, ほぼ直線状に延びて南側でSD06に接続する。覆土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土せず, 覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

SD06 (第12図, 写真図版3)

検出位置はE2グリッドである。掘り方は浅い半円状を呈する。規模は長さ6.96m, 上端部の最大幅は0.98m, 下端の最大幅は0.85m, 深さは16~18cmを測る。走行方向はN-83°-Eを示し, 直線状に延びて東側でSD05に接続する。覆土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土せず, 覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

SD07 (第12図, 写真図版3)

検出位置はE2グリッドである。西側は調査区外に延びる。掘り方は浅い箱状を呈する。規模は長さが5.67m, 上端部の最大幅が0.63m, 下端の最大幅が0.44m, 深さは13~14cmを測る。走行方向はN-89°-Eを示し, 覆土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は出土せず, 覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

SD08 (第12図, 写真図版3)

検出位置はE2グリッドである。掘り方は浅い箱状を呈する。規模は長さが3.11m, 上端部の最大幅が0.50m, 下端の最大幅が0.33m, 深さは11~13cmを測る。走行方向はN-33°-Eを示し, 直線状に延びて北側でSD06に, 南側でSD09に接続する。覆土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は, 土師器1点(坏1)が出土したが, 小破片で摩耗が著しい。覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

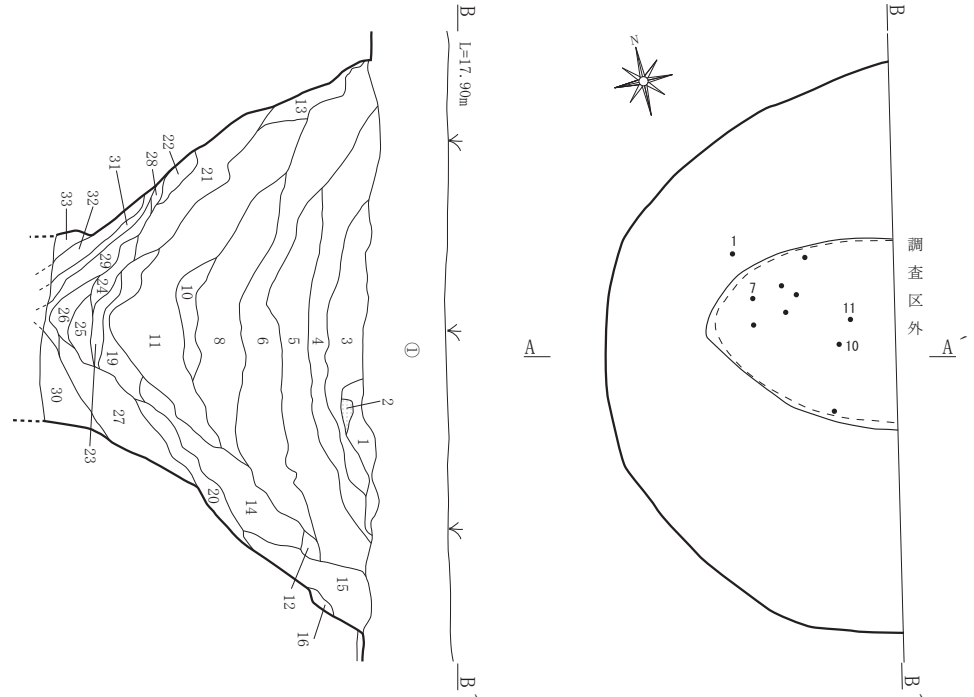
SD09 (第12図, 写真図版3)

検出位置はE1・2グリッドで, 西側は調査区外に延びる。掘り方は浅い箱状を呈する。規模は長さが4.84m, 上端部の最大幅が1.13m, 下端の最大幅が0.90m, 深さは15cm前後を測る。走行方向はN-75°-Wを示し, 直線状に延びてSD08と重複する。覆土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土せず, 覆土の状態が基本土層①に類似するため, 新しい時期に掘り込まれた可能性がある。

(2) 井戸跡

SX01 (第13・14図, 第6・8表, 写真図版3)

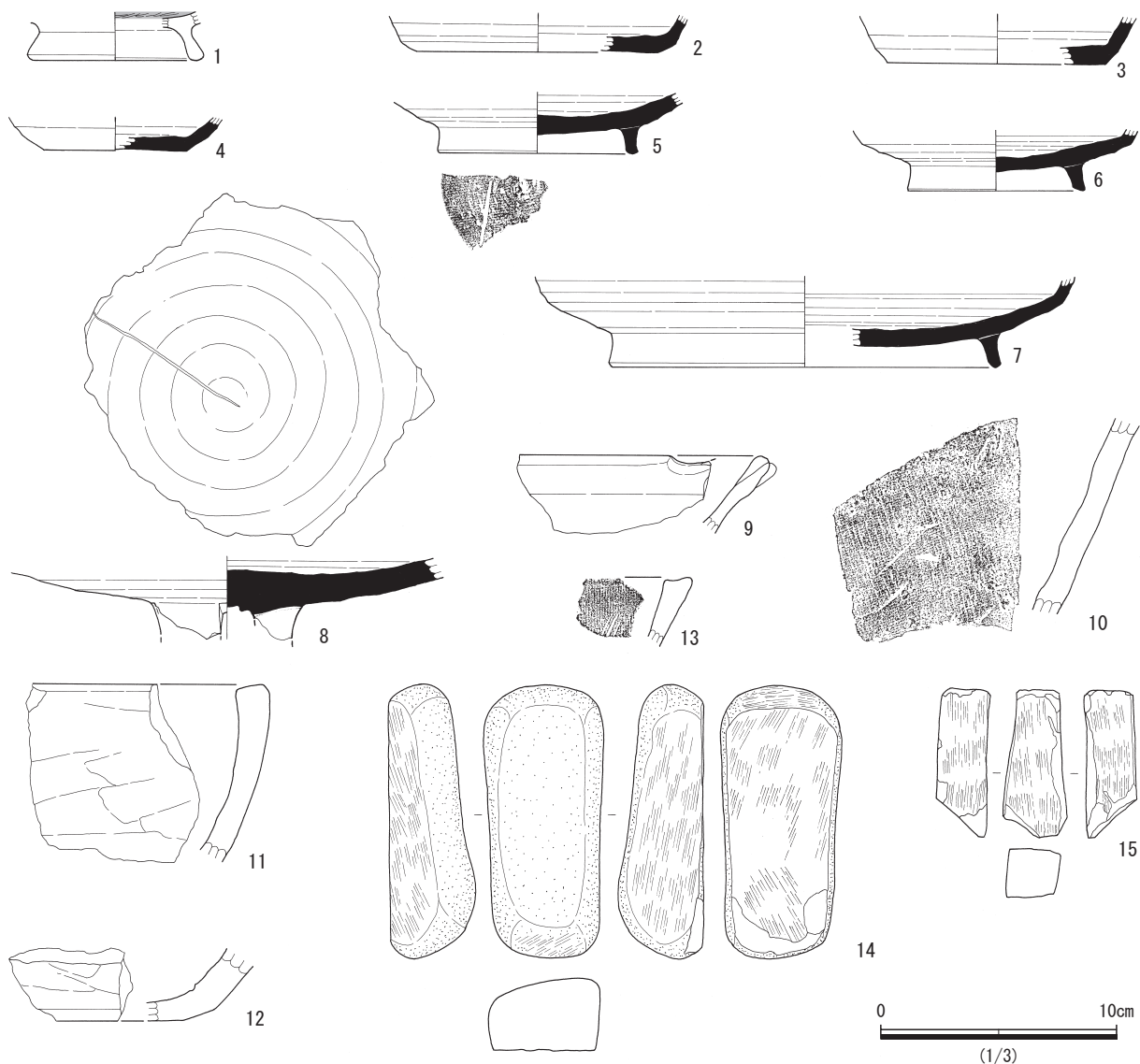
検出位置はA3グリッドである。本跡は素掘りの井戸と考えられるが, 東側半分は調査区外になり, さらに調査区壁際での検出であったため安全上底部まで完掘することができなかった。形態は, 平面形が円形を基調とし, 断面形は上部が挿鉢状, 下部が筒状に掘り込まれた漏斗形となる。規模は, 開口部の径が4.60m, 下部の長軸が現存値で1.50m, 短軸が1.38mを測り, 長軸方向がN-75°-



SX01 土層説明

1. 黒色土 10YR2/1 黄色粒微量。締りやや強、粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/1 貝混土層。締り弱、粘性なし。*貝はオオタニシ主体。
3. 黒褐色土 10YR3/1 白色粒微量、黄色粒微量。締り強、粘性弱。
4. 暗褐色土 10YR3/3 白色粒微量、ローム粒中量、礫(小〜中)少量。締りやや強、粘性弱。
5. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ3〜7mm)少量、礫(小〜中)多量(40%)。締りやや強、粘性弱。
6. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒少量、礫(小〜大)多量(20%)。締りやや強、粘性弱。
7. 灰黄褐色土 10YR4/2 ロームブロック(φ3〜7mm)中量、白色粒少量、礫(小〜大)多量(40〜50%)。締り有、粘性弱。
8. 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒中量、ロームブロック(φ3〜5mm)少量、礫(小〜中)多量(20%)。締りやや強、粘性弱。
9. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ3〜5mm)中量、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜5mm)微量、礫(小〜中)中量。締り有、粘性やや有。
10. 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ3〜7mm)少量、礫(小〜中)少量。締り有、粘性やや有。
11. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ3〜10mm)中量、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜15mm)少量、礫(小〜中)少量。締り有、粘性やや有。
12. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3〜5mm)少量。締り有、粘性弱。
13. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ5〜10mm)少量。締り有、粘性弱。
14. 黒色土 10YR2/1 ロームブロック(φ3〜7mm)中量、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜7mm)少量。締り有、粘性やや有。
15. 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒少量、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜5mm)微量、礫(小〜中)微量。締り有、粘性やや有。
16. 褐色土 10YR4/4 ロームブロック(φ5〜7mm)中量。締り有、粘性やや有。
17. 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロック(φ5〜10mm)少量、斑状の褐色土(10YR4/4)を全体に含む。締り有、粘性やや有。
18. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム土混土。締り有、粘性有。
19. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ3〜7mm)中量、黄褐色土(10YR8/6)微量、礫(小)微量。締り有、粘性有。
20. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3〜15mm)多量(20〜30%)、斑状の黒褐色土(10YR3/2)をまばらに含む。締り有、粘性有。
21. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム土互層状に多量(40%)を含む。締り有、粘性有。
22. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3〜5mm)微量。締り有、粘性やや有。
23. 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック(φ5〜15mm)多量(30〜40%)。締りやや弱、粘性有。
24. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック(φ3〜5mm)中量、黒褐色土(10YR3/1)多量(20%)。締りやや弱、粘性あり。
25. 褐色土 10YR4/4 ロームブロック(φ3〜10mm)多量(20〜30%)。締りやや弱、粘性有。
26. 褐色土 10YR4/6 ローム粒少量、ロームブロック(φ3〜5mm)微量。締りやや弱、粘性有。
27. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム土互層状に多量(40〜50%)を含む。締り有、粘性有。
28. 明黄褐色土 10YR6/6 ローム土主体、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ5〜10mm)を密に含む。締り有、粘性有。
29. 黄褐色土 10YR5/6 ローム土主体、黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜5mm)少量。締り有、粘性有。
30. にぶい黄褐色土 10YR4/3 黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜10mm)少量、灰黄褐色土(10YR4/2)を互層状に多量(40%)含む。締り弱、粘性有。
31. 灰黄褐色土 10YR4/2 黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜5mm)微量。締り弱、粘性有。
32. にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜7mm)少量。締り弱、粘性有。
33. 灰黄褐色土 10YR4/2 粒状のにぶい黄褐色土(10YR5/4)少量。締り弱、粘性有。
34. にぶい黄褐色土 10YR6/4 粘土主体。締りやや弱、粘性強
35. にぶい黄褐色土 10YR5/3 粘土混土。締り弱、粘性やや強
36. 灰黄褐色土 10YR5/2 にぶい黄褐色土(10YR6/4)粘土ブロックを密に含む。締り弱、粘性有。
37. 灰黄褐色土 10YR4/2 黄褐色(10YR8/6)ブロック(φ3〜5mm)少量。締り弱、粘性有。

第13図 SX01



第14図 SX01 出土遺物

Wで、南北両側の壁より西側壁の傾斜が急になっている。深さは検出面から2.60 cmまで掘り下げた地点で断念したが、これよりさらに100 cm以上は掘り込まれている。覆土は埋め戻しが行われた人為堆積を呈し、4～8層中で礫を多量に含んでいることから閉塞されたと考えられる。一方、下部の堆積土はローム土を多量に含んだ黒褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土が複雑に堆積している。構築の際には粘土層を掘り抜き礫層に達した段階で、下部は筒状の掘り込みに移行したようである。遺物は、土師器18点（坏2，碗1，甕14，鉢1），須恵器41点（坏5，高台付坏9，盤4，蓋1，甕19，壺類2，高坏1），陶磁器類2点，土器類7点，弥生土器2点，石製品2点が出土した。新旧遺物が混在し、全て礫層中での出土であることから、閉塞された際の流れ込みと判断される。最新遺物である10～13の陶器・土器類の時期を重視するならば、中世以降に閉塞されたと考えられる。

(3) 土坑

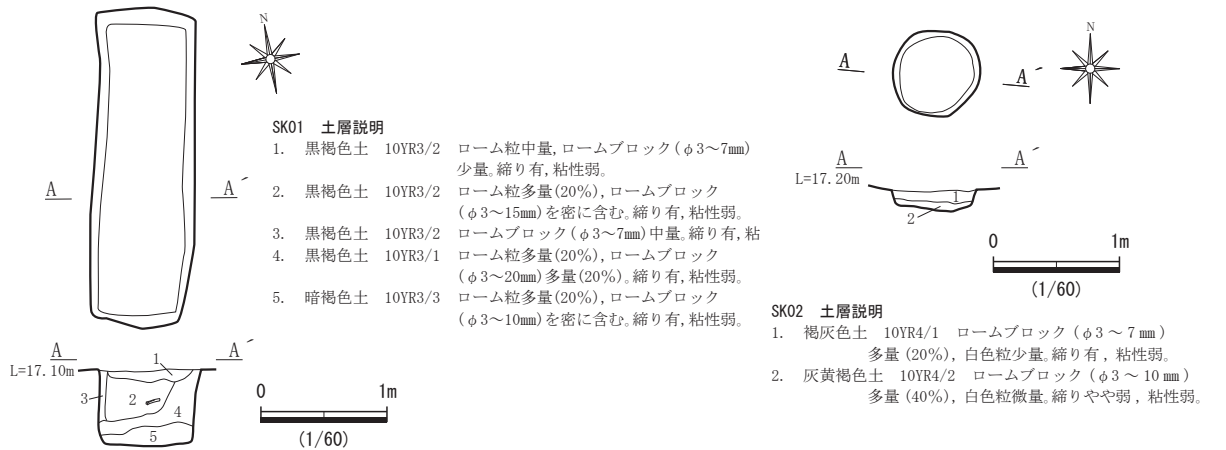
SK01（第15図，写真図版3）

検出位置はD2，E2グリッドである。形態は平面形が長方形，断面形が箱状を呈し，規模は長軸

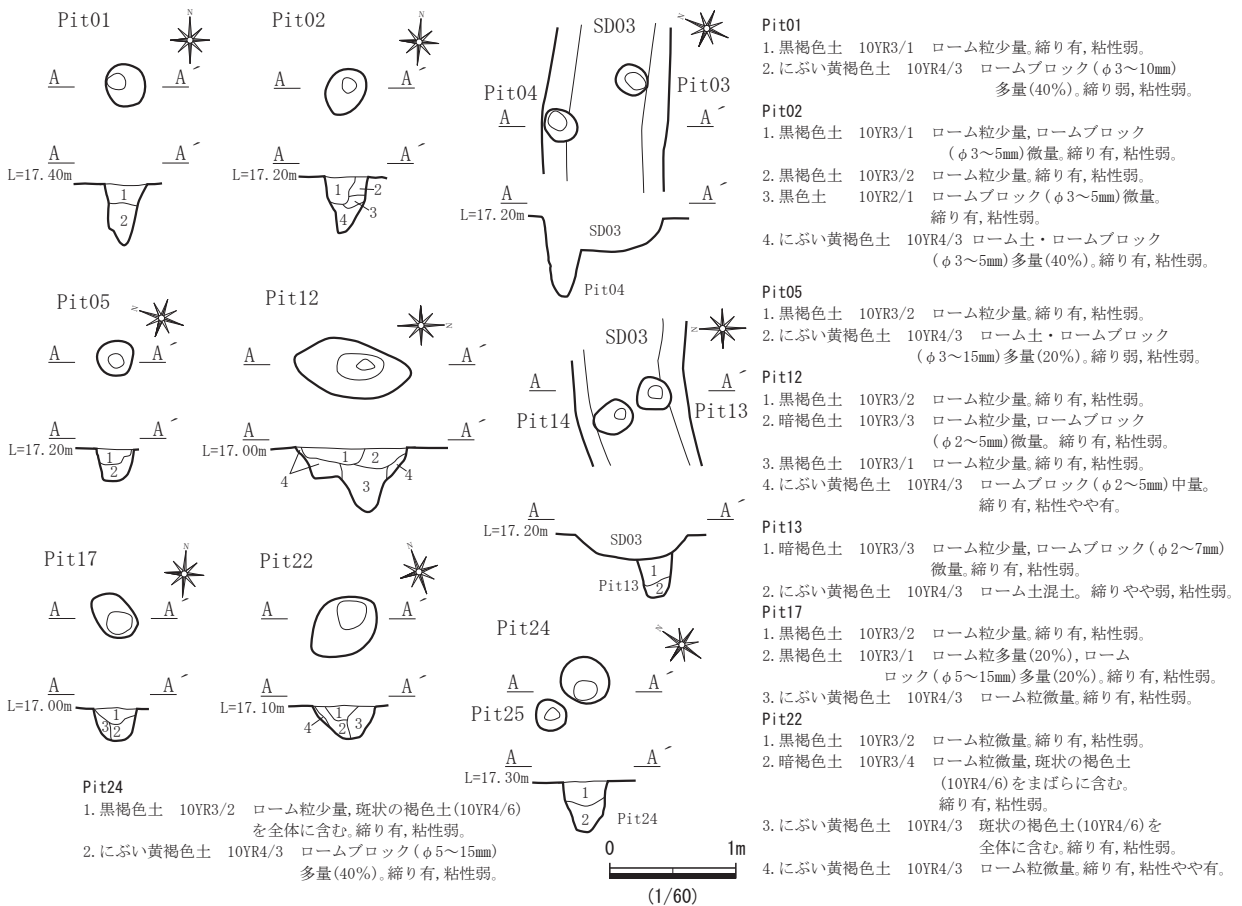
が2.53 m, 短軸が0.81 m, 深さは61 cmを測る。長軸方向はN-11°-Eを示す。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土を主体とした人為堆積である。遺物は, 土師器1点(坏1), 須恵器4点(坏1, 高台付坏1, 甕2), 鉄製品1点(不明1)が出土したが, 小破片で時期は判然としない。

SK02 (第14図, 写真図版3)

検出位置はF2グリッドである。形態は平面形が円形, 断面形が皿状を呈し, 規模は長軸が0.72 m, 短軸が0.67 m, 深さは17 cmを測る。長軸方向はN-43°-Eを示す。覆土はロームブロックを多量に含む褐灰色土, 灰黄褐色土の人為堆積である。遺物は出土せず, 時期は判然としない。



第15図 土坑



第16図 ピット

第3章 調査の成果

(4) ピット (第16図, 第3表)

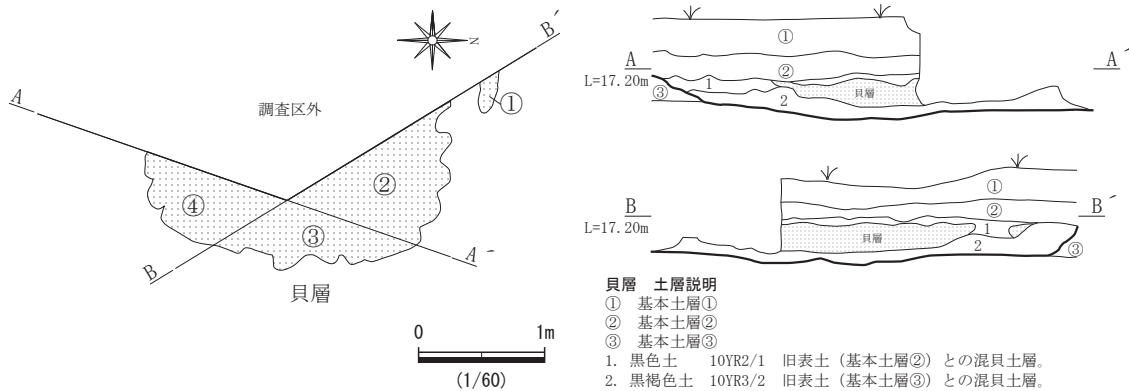
本地点では、単独のピットを27基検出した。各ピットの詳細は一覧表にまとめてある。ピットはSD03付近で集中するものの関連性に乏しく、全体的に見ても調査区内に散在し、規則性はうかがえない。ピット以外でも同様の落ち込みを確認しているが、覆土の状態や斜めに差し込んでいる状態から植栽痕と判断されるものが混在した。ピットとしたのは形態が整っていることを根拠にして選定しているが、その中には覆土が植栽痕と類似するものも認められ、性格は判然としない。遺物はPit06・22のみで出土したが、いずれも土師器甕の小破片で時期は不明である。

第3表 ピット一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	形状	規模(cm)			重複・覆土・特徴・その他	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
Pit01	A3	円形	37	33	48	2層。底面先細り。		
Pit02	B3	楕円形	40	32	44	4層。断面形やや不整形。		
Pit03	A3	円形	26	26	25	SD03と重複。単層, 10YR3/1黒褐色土, ローム粒少量含む。		
Pit04	A3	楕円形	33	24	63	SD03と重複。単層, 10YR3/1黒褐色土, ローム粒少量含む。斜め差し込む。		
Pit05	A2	円形	30	29	26	2層。やや浅め。		
Pit06	D2	楕円形	43	30	32	単層, 10YR4/3にぶい黄褐色土, ローム粒少量含む。	土師器甕1	
Pit07	A3	楕円形	31	21	42	単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム土・ロームブロック中量含む。		
Pit08	A3	円形	35	34	54	単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム土混土。		
Pit09	A3	円形	34	22	33	単層, 10YR4/3にぶい黄褐色土, ローム粒少量含む。		
Pit10	D2	円形	36	34	65	単層, 10YR4/3にぶい黄褐色土, ローム粒微量含む。		
Pit11	D2	円形	43	37	47	単層, 10YR3/2黒褐色土, ロームブロック多量(20~30%)含む。		
Pit12	D2	楕円形	93	46	52	4層。断面形やや不整形。		
Pit13	A3	円形	30	26	39	SD03と重複。2層。		
Pit14	A3	楕円形	43	35	61	SD03と重複。単層, 10YR3/1黒褐色土, ローム粒少量含む。		
Pit15	欠番							
Pit16	E2・3	楕円形	49	35	43	単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム粒中量含む。		
Pit17	C2	楕円形	40	31	27	3層。やや浅め。		
Pit18	C2	円形	30	28	58	単層, 10YR3/2黒褐色土, ローム粒微量含む。		
Pit19	C2	楕円形	30	24	53	単層, 10YR3/2暗褐色土, ローム粒微量含む。		
Pit20	E2	円形	36	31	35	単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム粒少量含む。		
Pit21	E2	円形	46	40	10	単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム粒少量・ロームブロック微量含む。		
Pit22	E2	楕円形	62	43	26	4層。断面形やや不整形。	土師器甕1	
Pit23	E2	円形	36	35	4	単層, 10YR4/3にぶい黄褐色土, ローム土混土。		
Pit24	F2	円形	42	39	41	2層。		
Pit25	F2	円形	26	26	37	単層, 10YR3/1黒褐色土, ローム粒多量(20%)・ロームブロック少量含む。		
Pit26	F2	円形	43	37	25	単層, 10YR3/1黒褐色土, ローム粒多量(20%)・ロームブロック中量含む。		
Pit27	欠番							
Pit28	欠番							
Pit29	E2	円形	35	32	36	SD09と重複。単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム粒・ロームブロック各少量含む。		
Pit30	E2	円形	36	30	36	SD09と重複。単層, 10YR3/3暗褐色土, ローム粒少量含む。		

(5) 貝層 (第17図, 第4・5表, 写真図版3)

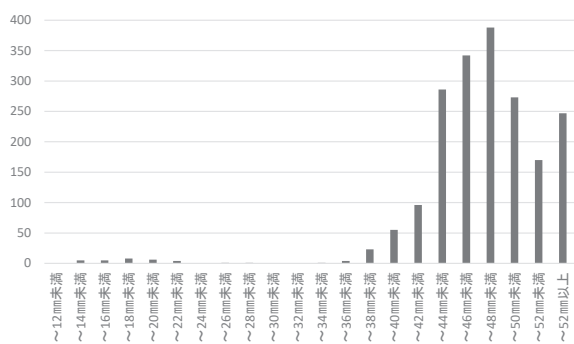
検出位置はD2グリッドである。西側半分は調査区外になる。平面的には方形状に広がり、中央部が若干窪んでいる。確認できる範囲は現存値で東西が1.70m、南北が2.34m、層厚は最大で23cmを測る。組成及び大きさについては表に示した。調査は全量を①~④区に分割して採取した。貝のほ



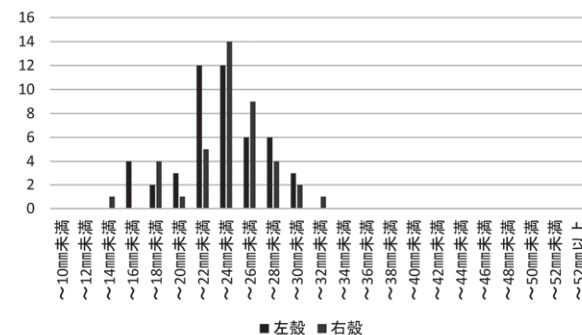
第17図 貝層

第4表 貝類計測値グラフ (オオタニシ・マシジミ)

オオタニシ



マシジミ

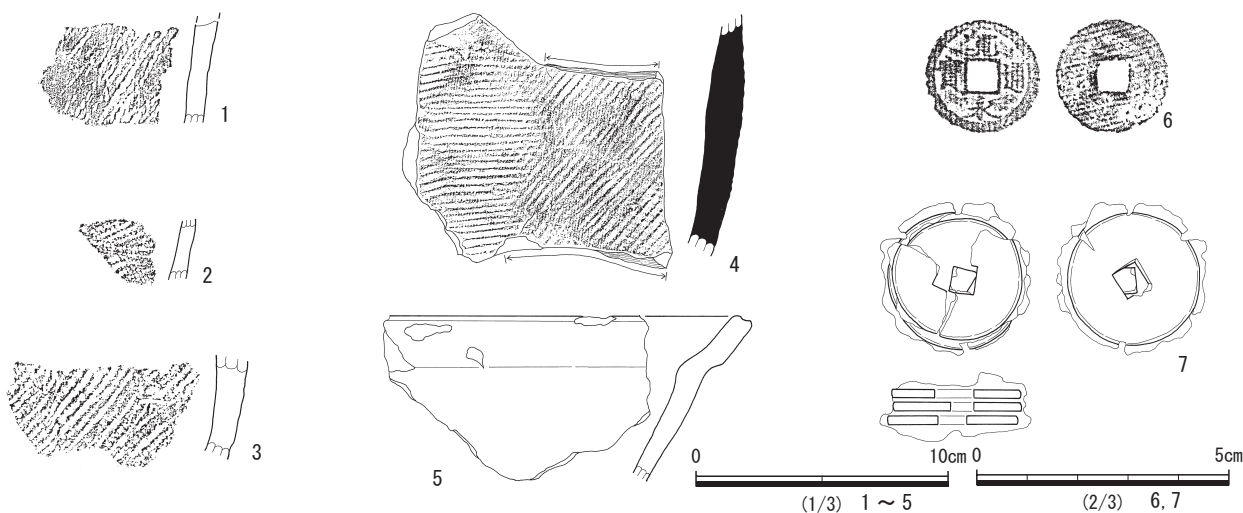


第5表 貝類計測値一覧表 (オオタニシ・マシジミ)

遺構	貝層				合計
	貝層①	貝層②	貝層③	貝層④	
殻長					
~10mm未満	63	1965	583	33	2644
~12mm未満					0
~14mm未満	3		2		5
~16mm未満			5		5
~18mm未満			8		8
~20mm未満			6		6
~22mm未満			4		4
~24mm未満					0
~26mm未満			1		1
~28mm未満			1		1
~30mm未満					0
~32mm未満					0
~34mm未満		1			1
~36mm未満		3		1	4
~38mm未満		13	3	7	23
~40mm未満		29	8	18	55
~42mm未満	1	63	13	19	96
~44mm未満	4	140	69	73	286
~46mm未満	5	186	72	79	342
~48mm未満	7	189	97	95	388
~50mm未満	2	122	41	108	273
~52mm未満	1	63	45	61	170
~52mm以上	2	106	46	93	247
合計	88	2880	1004	587	4559

遺構	貝層③		貝層④		合計	
	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻
殻長						
~10mm未満					0	0
~12mm未満					0	0
~14mm未満				1	0	1
~16mm未満	1		3		4	0
~18mm未満			2	4	2	4
~20mm未満	1		2	1	3	1
~22mm未満			12	5	12	5
~24mm未満			12	14	12	14
~26mm未満			6	9	6	9
~28mm未満			6	4	6	4
~30mm未満			3	2	3	2
~32mm未満			1	0	1	0
~34mm未満					0	0
~36mm未満					0	0
~38mm未満					0	0
~40mm未満					0	0
~42mm未満					0	0
~44mm未満					0	0
~46mm未満					0	0
~48mm未満					0	0
~50mm未満					0	0
~52mm未満					0	0
~52mm以上					0	0
合計	2	0	46	41	48	41

とんどは巻貝のオオタニシで占められ、二枚貝はマシジミが主体であるが巻貝に比べ少ない。他に巻貝ではマイマイやキセル、二枚貝ではマツカサがごくわずかに認められるが計測は不能である。オオタニシは4,559個体でその内58%が10mm未満の大きさであるのに対し、それ以外は42mm以上の大きさのものが主体になる。一方、マシジミは総数89点で44個体分が採取され、貝層範囲南側の④区に集中している。魚骨や獣骨は含まれていない。貝層は旧表土中(基本土層②)で検出されており、淡水産の貝のみであることから、中・近世以降の時期に堆積したと考えられる。



第18図 遺構外出土遺物

第3章 調査の成果

(6) 遺構外出土遺物 (第18図, 第6・9表, 写真図版4)

ここでは、遺構の時期に伴わない遺物及び表採遺物を遺構外出土遺物としてあげた。1～3は縄文が施文される土器で、本地点ではこの3点のみである。縄文は付加条第1種縄文と細い原体の単節縄文で、弥生土器の可能性もある。1・2はSX02に混在して出土した。4は厚手の須恵器甕の胴部片で破片側面を転用し、砥石として利用している。5は外面に煤が付着していることから内耳土鍋等の口縁部片と考えられる。6・7は銭貨で、6の銅銭は寛永通宝とわかるが、7の鉄銭は3枚が付着し、錆化がひどいため銭種は不明である。(高野)

第6表 出土遺物観察表(土器)

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面/内面)	焼成	備考
SD01	1	土師器 坏	— (1.6) (4.0)	底部片。ロクロ成形。底部は回転糸切り痕。	白色砂粒, 針状物微	10YR7/4にぶい黄橙	やや 良好	
SD01	2	須恵器 坏	— (1.2) (7.6)	底部片。底部は回転ヘラケズリで二次底部面あり。線刻及び墨痕が認められ、墨書の可能性があるが不鮮明。	チャート, 黒色粒	5Y6/1灰	良好 堅緻	
SD01	3	須恵器 坏	— (1.7) 7.3	底部30～40%存。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。切り離し部残存。	チャート, 白色砂礫, 黒色粒少, 針状物多	5Y5/2灰オリーブ	良好 堅緻	
SD01	4	須恵器 高台付坏	— (2.0) —	底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ後高台部を貼り付けたとみられるが、高台部は剥離し欠失。	チャート, 黒色粒, 白色粒	5Y5/1灰	良好 堅緻	
SD01	5	須恵器 高台付坏	— (1.2) —	底部片。ロクロ成形。高台部欠失。底部は回転ヘラケズリ。体部外面に自然釉がかかる。	石英少, チャート, 黒色粒	7.5Y3/1オリーブ黒 7.5Y5/1灰	良好 堅緻	
SD01	6	須恵器 高台付坏	— (3.9) —	体～底部30%存。ロクロ成形。高台部欠失。底部は回転ヘラケズリで高台部は貼り付け後ナデ。	石英, チャート, 白色粒	5Y5/1灰	良好 堅緻	
SD01	7	須恵器 甕	— (8.8) (17.6)	胴下半～底部片。外面はヘラナデ後体部下端をヘラケズリ。内面はヘラナデで孔部周辺をヘラケズリ。	チャート, 白色砂粒, 砂礫	7.5YR4/2灰褐 7.5YR5/2灰褐	良好 堅緻	
SD02	1	須恵器 坏	— (2.2) (8.0)	体～底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後丁寧なナデ。二次底部面あり。	白色砂礫, 黒色粒多	7.5Y5/1灰	良好 堅緻	
SD02	2	須恵器 盤	— (3.9) (16.4)	体～底部20%存。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。体部外面の一部に自然釉がかかる。	チャート, 白色砂礫, 黒色粒	2.5Y6/2灰黄	良好 堅緻	
SD02	3	須恵器 甕	— (5.8) (12.0)	体部下端～底部片。体部外面は平行タタキ。体部下端から底部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	白色砂礫, 黒色粒, 針状物	2.5Y5/2暗灰黄	良好	
SD02	4	須恵器 壺	— (14.0) (3.1) —	口縁部片。ロクロ成形。内面に自然釉がかかる。	黒色粒, 白色砂礫	N1.5/ 10Y5/1灰	良好	
SX01	1	土師器 椀	— (2.0) (7.0)	底部高台部片。内面黒色処理。全体に密なミガキ。	石英, 長石, 針状物多	7.5YR6/6橙	良好	
SX01	2	須恵器 坏	— (1.6) (10.2)	体～底部片。ロクロ成形。二次底部面あり。底部はナデ。	黒色粒, チャート微, 針状物微	5Y5/1灰	良好 堅緻	
SX01	3	須恵器 坏	— (2.1) (9.2)	体～底部片。ロクロ成形。底部はナデ。	黒色粒, チャート, 針状物微	5Y5/1灰	良好 堅緻	
SX01	4	須恵器 坏	— (1.5) (6.0)	体～底部片。ロクロ成形。底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ。	黒色粒, チャート, 白色粒微	2.5Y4/1黄灰	良好 堅緻	
SX01	5	須恵器 高台付坏	— (2.6) (8.2)	底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ後直線状のヘラ描きあり。高台付は貼り付け後ナデ。	石英, チャート, 白色粒多, 針状物多	7.5YR4/2灰褐	良好 堅緻	
SX01	6	須恵器 高台付坏	— (2.6) (7.4)	底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。	石英, チャート, 黒色粒, 針状物	5Y5/1灰	良好 堅緻	
SX01	7	須恵器 盤	— (3.8) (16.2)	体～底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデ。外面に自然釉がかかる。	白色砂礫, 透明砂粒微, 黒色粒, 針状物	2.5Y6/2灰黄	良好 堅緻	
SX01	8	須恵器 高坏	— (3.5) —	坏部～脚上端部片。ロクロ成形。坏部内面に直線状のヘラ描きあり。脚部は取り付け後ナデ。透かし痕4ヶ所あり。	チャート, 黒色粒, 白色粒, 針状物	2.5Y6/2灰黄	良好 堅緻	
SX01	9	陶器 鉢	— (3.3) —	口縁部片。ロクロ成形。指頭押圧により片口部を成形か。	砂粒, 長石, 針状物極微	5YR5/6明赤褐 7.5YR4/2灰褐	良好 堅緻	

第2節 検出された遺構と遺物

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調(外面/内面)	焼成	備考
SX01	10	陶器甕	(8.3)	胴部片。外面はハケ調整後わずかにヘラナデ。内面はヘラナデ。	長石、砂礫	5YR4/3にぶい赤褐 5YR4/6赤褐	良好 堅緻	常滑焼
SX01	11	土器内耳土鍋	(7.5)	口縁へ体部片。口唇部は面取り。口縁部はヨコナデ。体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ。	透明砂粒、砂礫少、石英	7.5YR3/1黒褐 10YR3/1黒褐	良好	
SX01	12	土器内耳土鍋	(3.1)	底部片。外面はヘラケズリ、外面はヘラナデ。	透明砂粒、石英	7.5YR3/2黒褐 10YR3/2黒褐	良好	
SX01	13	陶器播り鉢	(2.7)	口縁部片。口縁部ヨコナデ。口唇部面取り。播目3条が認められる。	砂粒	5YR5/6明赤褐	やや良好	
遺構外	1	弥生カ壺カ	(4.0)	胴部片。付加条縄文(RのZ巻カ)を施文する。	透明砂粒、白色砂粒	7.5YR4/2灰褐 5YR5/6明赤褐	普通	
遺構外	2	弥生カ壺カ	(2.3)	胴部片。単節LR縄文を施文する。	透明砂粒、白色砂粒	10YR4/2灰黄褐 10YR6/6明黄褐	普通	
遺構外	3	弥生カ壺カ	(4.1)	胴部片。単節LR縄文を施文する。	透明砂粒、角閃石・輝石類	7.5YR4/3褐 10YR6/4にぶい黄橙	普通	
遺構外	4	須恵器甕	(9.6)	胴部片。外面は不定方向の平行タタキ。内面は無文の当て具痕。割れ口一部を砥石として利用。	白色砂粒、白色砂礫、チャート、針状物	N5/ 灰	良好	
遺構外	5	土器内耳土鍋	(6.5)	口縁部片。口唇部は面取り。外面には煤付着。	透明砂粒、灰色粒多	10YR3/2黒褐 10YR7/4にぶい黄橙	普通	

第7表 出土遺物観察表(瓦)

出土地点	図版番号	全長(cm)	厚さ(cm)	凹面痕跡・調整	凸面痕跡・調整	胎土・鉱物	焼成	色調(凹面:凸面)	備考
SD02	5	(7.1)	1.3~1.4	成形:布目圧痕 調整:なし	成形: - 調整:ヘラナデ	白色粒、角閃石・輝石類少	普通	10YR7/3にぶい黄橙; 10YR7/3にぶい黄橙	側端部片。端部面取りはヘラケズリ。

第8表 出土遺物観察表(石製品)

遺構番号	図面番号	種類器種	部位・残存率・製作技法・その他特徴	備考
SD01	8	石製品砥石	長さ:13.4cm 幅:5.7cm 厚さ:3.0cm 重量:342.0g 石材:砂岩	
SD02	6	石製品砥石	長さ:7.1cm 幅:4.8cm 厚さ:4.0cm 重量:202.0g 石材:砂岩 刷り面四面。使用顕著。側面に研磨の溝あり。	
SX01	14	石製品砥石	長さ:11.6cm 幅:5.1cm 厚さ:3.6cm 重量:347.0g 石材:砂岩 刷り面三面。側面の使用が顕著。	
SX01	15	石製品砥石	長さ:6.3cm 幅:2.7cm 厚さ:2.3cm 重量:48.0g 石材:細粒砂岩 刷り面は四面。全体に使用顕著。	

第9表 出土遺物観察表(銭貨)

遺構番号	図面番号	種類器種	部位・残存率・製作技法・その他特徴	備考
遺構外	6	銅製品銭貨	銭名:寛永通宝(新寛永) 銭径:2.2cm 内径:1.9cm 厚さ:(0.1)cm 重量:1.5g 背面:なし	
遺構外	7	鉄製品銭貨	銭径:2.6cm 厚さ:0.2cm 重量:9.5g(3枚分) 3枚付着。錆化激しく銘は不明。	

第10表 出土遺物集計表

遺構	土師器														須恵器										陶磁器		土器類		弥生		瓦		石製品		鉄製品(銭貨)							
	環		環(内鼎)		椀		壺		鉢		環		高台付環		盤		蓋		甕		甗		甗		壺		高環		陶磁器		土器類		弥生		瓦		石製品		鉄製品(銭貨)			
	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片	個体	破片		
SD01.上層							2		1		4		2						6		1																		1			
SD01.下層		1								11		4		1		1		11																								
SD02.上層							3								2		1		4																					1		
SD02.中層		1					2			3		3							2																					1		
SD02.下層							1			2																																
SD02一括																																										
SD04							1																																			
SD08		1																																								
SX01				2		1		14		1		5		9		4		1		19					2		1		2		7		2							2		
SK01		1								1		1							2																						1	
Pit06							1																																			
Pit22							1																																			
貝層							1																																			
貝層下							1																																			
A3グリッド													1																													
C2グリッド																																										
E2グリッド												1		1																												
F2グリッド												1																														(4)
表採																																										
合計	0	4	0	2	0	1	0	27	0	2	0	37	0	21	0	7	0	3	0	46	0	1	0	7	0	1	0	2	0	10	0	3	0	1	0	4	(4)	1				

第4章 総括

1. 土地利用の変遷

東前原遺跡の地形は、標高が17～18mで調査区の北端が最も高く、緩やかに傾斜しながら南側の平坦地へと続く地形である。これまでの調査から奈良・平安時代を主体とする集落の営みが明らかになっているが、今回調査の対象となった第7地点（第2次）では建物跡等の痕跡は認められなかった。本地点は東前原遺跡範囲の南端に位置し、集落の主体はこれより北側で展開するようである。

検出された溝跡SD01・02は時期を示す明瞭な遺物は出土していないものの、調査により該期集落との関連性が強いことは疑いがないところである。さらに双方の溝跡はSD02構築後SD01への掘り直しが確認されていることから、長期間にわたり利用されていたことがうかがわれる。一方で、大型の井戸跡SX01は形態や出土遺物の様相から中世と考えられ、集落が継続した可能性を示唆している。溝跡を境にして南側では明瞭な遺構は見当たらず、浅い谷が台地部を分断している。その谷部に近接して淡水系オオタニシを主体とした貝層が堆積し、谷部に生息したものを食したとみられる。谷は埋没後に耕作地として長らく利用されたようで、SD04～09はその痕跡であろう。

2. 溝の性格について

本地点で重視されるのは、溝跡SD01・02の性格である。これら溝跡の北側は標高が高い平坦地で集落が継続的に認められる範囲となるのに対し、南側は標高の低い谷部となっていることから、明らかに集落とその外部を区別するために巡らせた区画溝であるのは間違いないであろう。さらに第8地点第2～4次発掘調査でも断面形態に違いはあるものの同様の規模を有する溝跡が検出され、これら周辺地点の溝跡を俯瞰してみると、方形状に圍繞された可能性がうかがわれる。

ここで問題になるのは溝の構築された時期とその性格である。各地点の溝跡から出土した遺物はほとんどが混入遺物であるため、遺物から時期を把握することは困難である。そうなると遺構の形態や配置から推定する以外にはない。候補には中世館跡、豪族居館、官衙的集落の圍繞などいくつかあげられる。中世館跡は東前原遺跡周辺に点在することが周知されており、その内のひとつである可能性は十分に考えられるが、中世に関連する遺物を伴わず、溝の規模から防御性に劣るように思われる。豪族居館については田中広明氏が類型化を試みているが、それらを照らし合わせてみると本地点周辺の区画する範囲は広大過ぎるようである。最後に官衙的集落を圍繞する溝という案が残る。掘り直しが行われていることでの長期間の利用から重要施設を区画した溝であることは妥当であろう。さらに、官衙及び官衙関連集落での区画溝に一般的な逆台形の掘り方を呈していることからその可能性は捨て切れない。本遺跡と同台地上に立地する大串遺跡（第7地点、第2章第2節参照）では溝跡に圍繞された正倉別院の所在が確認されているが、断面形状は薬研状であることから、本地点で同様の施設を区画したという確証は得られない。以上のように性格を決定づける根拠が見出せない現状で、溝の性格を言及するにはまだ早急であろう。（高野）

【参考・引用文献】

田中広明 2003「国司の館と地方豪族の家」『地方の豪族と古代の官人』柏書房

山中敏史 2003「遮蔽・区画施設」『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

写真図版



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

図版 2



調査区北側全景（南東から）



調査区中央部全景（北東から）



調査区南側全景（北西から）



SD01 全景（東から）



SD02 全景（東から）



SD01・02 土層断面（東から）



SD03 全景（東から）



SD04 全景（南東から）



SD05 ~ 09 全景 (西から)



SX01 全景 (西から)



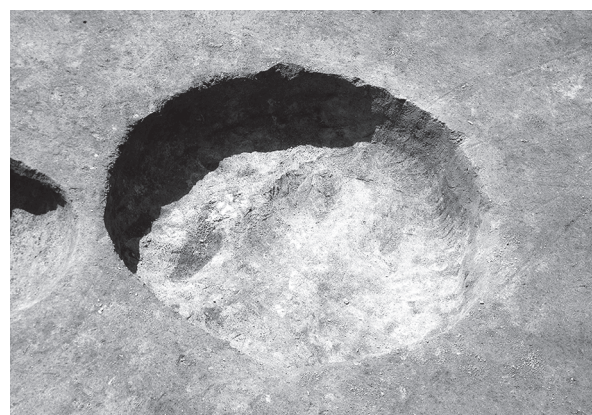
SX01 土層断面 (西から)



SX01 土層断面 (北から)



SK01 全景 (南から)



SK02 全景 (東から)

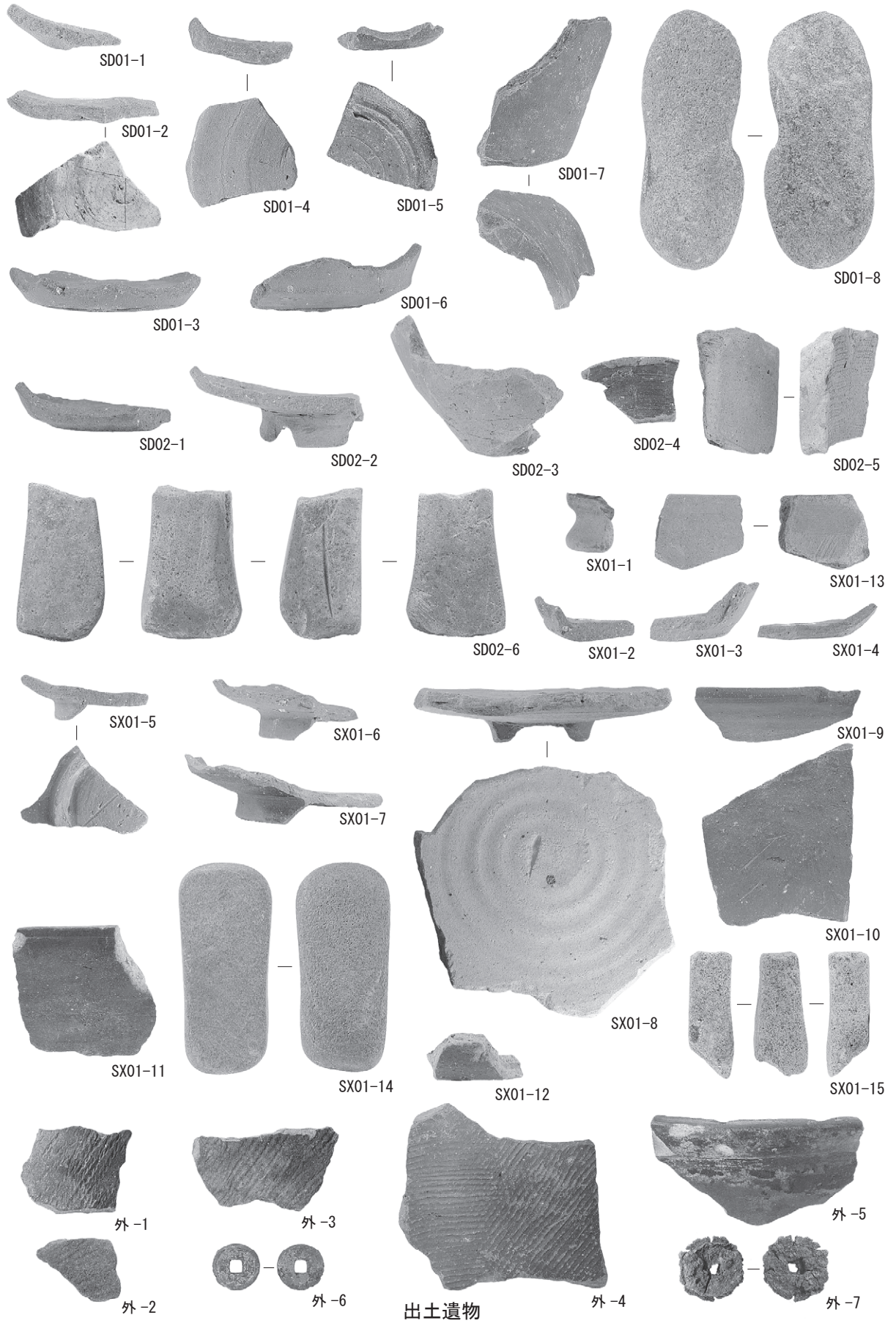


D 2 グリッド 内貝層検出状況 (北東から)



貝層断面 (東から)

图版 4



抄 録

ふりがな	とうまえはらいせき だいななちてんだいにじ							
書名	東前原遺跡 (第7地点第2次)							
副書名	区画道路 10-2 号線道路改良 (その3) 及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第 81 集							
編著者名	米川暢敬 高野浩之 丸山優香里 昆 志穂							
編集機関	株式会社地域文化財研究所 〒 270 - 1327 千葉県印西市大森 2596 - 9 TEL 0476 - 42 - 7820							
発行機関	水戸市教育委員会 〒 310 - 0852 茨城県水戸市笠原町 978 - 5 TEL 029 - 306 - 8132 (担当) 教育委員会事務局歴史文化財課埋蔵文化財センター 〒 311 - 1114 茨城県水戸市塩崎町 1064 - 1 大串貝塚ふれあい公園内 TEL 029 - 269 - 5090							
発行年月日	2016 年 (平成 28 年) 7 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
とうまえはらいせき 東前原遺跡	いばらきけん み と し とうまえちよう 茨城県水戸市東前町 1076 番地外	08201	259	36° 20′ 22″	140° 31′ 37″	2016. 03. 28 ～ 2016. 04. 22	690 m ²	土地区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東前原遺跡 (第7地点 第2次)	集落跡	奈良・平安時代	溝跡 3 条	縄文土器, 弥生土器 (壺), 土師器 (坏・椀・ 甕・鉢), 須恵器 (坏・ 高台付坏・盤・蓋・甕・ 甌・壺・高坏), 陶磁 器類, 土器類 (土鍋), 瓦, 石製品 (砥石), 鉄製品, 銭貨		溝跡 SD02 は規模や掘り 方から見て集落の重要 施設を区画した溝であ ることが想定され, そ の後 SD01 の掘り直しが 行われていることから 長期間存続したことが うかがえる。		
		中・近世以降	溝跡 6 条 井戸跡 1 基 土坑 2 基 ピット 27 基 貝層 1 基					
要約	本地点は, 標高 17 ~ 18 m の台地上にあり, 調査区の中央部が浅い窪地になって台地部を分断している。主な遺構は台地北側の調査区内で最も高い位置に所在する。溝跡は, SD01・02 が重複し, SD02 を廃棄した後に SD01 の掘り直しが行われている。溝は出土遺物から 8 世紀代後半には機能し, 9 世紀代まで存続した可能性がある。井戸跡は調査区の北端で検出され, 播鉢状を呈した大型のものとなり, 中世の所産と考えられる。貝層は調査区中央部の西壁にかかって検出され, 含まれる貝はオオタニシ等淡水系が主体であり, 埋没している層から見ても概ね中世以降の堆積とみられる。							

水戸市埋蔵文化財調査報告第 81 集

東 前 原 遺 跡
(第 7 地点第 2 次)

区画道路 10 - 2 号線道路改良 (その 3) 及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 28 年 7 月 30 日 印刷

平成 28 年 7 月 30 日 発行

編 集 株式会社 地域文化財研究所

発 行 水戸市教育委員会

印 刷 能登印刷株式会社

〒920-0855 金沢市武蔵町 7 番 10 号

TEL (076)274-0084
